

# これからの ユネスコスクールを考えよう

ひろがり つながり ふかまる ESD 推進拠点  
Whole School Approach

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD  
-Current Status and Way Forward



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO  
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター

# これからの ユネスコスクールを考えよう

ひろがり つながり ふかまる ESD 推進拠点  
**Whole School Approach**

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD  
-Current Status and Way Forward





## 序言（はじめに）

ユネスコスクール全国大会前日の2015年12月4日に、「これからのユネスコスクールを考えよう」と題してユネスコスクールの質的向上について考えるワークショップが東京で開催されました（平成27年度日本／ユネスコパートナーシップ事業。主催：文部科学省、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU））。このワークショップは二部構成で行われ、第一部ではイギリスからESD及びサステイナブル・スクールの専門家であるアン・フィンレイソンさんからホールスクールアプローチについて学び、第二部では企画の段階から一緒に準備をしてくださった加盟校の先生から「国内のネットワークを立ち上げ、互いに学び合おう」ということが提案され、ネットワークを介して、各々が何を行いたいかについて意見交換をしました。この冊子はそのときの様子をまとめたものです。

「ユネスコスクール」はASPnet(UNESCO Associated Schools Project Network)に加盟している学校の日本での呼称で、ユネスコスクールはユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現する学校であり、世界にひろがるネットワークです。文部科学省および日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを持続可能な開発のための教育（ESD）の推進拠点として位置づけています。

「国連ESDの10年」最終年である2014年に岡山市で開催されたユネスコスクール世界大会で採択されたESD推進のためのユネスコスクー

ル宣言（ユネスコスクール岡山宣言）の一説に、「ESDの本質を理解するとともに、ESDの魅力を広く社会に伝えるため、児童生徒の変容、教師の変容、学校・地域の変容を明確に示します」とあります。そこに、ユネスコスクールの質的向上についてのヒントがあるかもしれません。

変容を起こす学びには自発的、内発的な視点が必要です。12月4日のワークショップはポジティブで、わくわくした雰囲気の中で5時間にもわたる学びあい参加者同士で進められました。きっとこの冊子を手にとった方も同じように内発的な変容をもたらす学びについてのアイデア、情報を得ることができるものと信じています。

この冊子を手にとった全ての方と一緒に学びあい、変容のある学びが多く学校や地域で実践されることを願っています。

ユネスコスクール事務局

目次  
CONTENTS

序言 .....02

第1章

基調講演とワークショップ .....05

ESDのホールスクールアプローチについて.....06

サポートネットワーク構築 英国の経験から .....34

アン・フィンレイソン  
( 持続可能性と環境教育 事務局長 )  
コーディネーター：永田 佳之  
( 聖心女子大学文学部教育学科教授 )

第2章

加盟校の先生からの提案

- ユネスコスクール加盟校主体のネットワーク強化に向けて .....53

ユネスコスクール加盟校主体の  
ネットワーク設立について .....54

第3章

ユネスコスクール事務局から .....57

第1章

基調講演とワークショップ





## ESD の ホールスクール アプローチについて

アン・フィンレイソン  
(持続可能性と環境教育 SEEd事務局長)



皆さん、こんにちは。まず、日本にご招待いただき、そして皆さまがたの持続可能な開発のための教育（ESD）活動に関して勉強させていただく機会を得たことに対して、心から喜んでおります。また ESD ということを考えますと、日本はここ 10 年、一番先頭に立っている国だということも言えると思います。

→パワーポイント [18ページ1番](#) を参照

今日は ESD のホールスクールアプローチについて講演してほしいと要請されたわけですが、私が話すのは、ESD についての教育ということではなく、ESD のための教育ということであります。

若い人たちが未知の将来に向かうにあたって、またその将来は、願わくは持続可能な将来だと思いますが、それに備えて若い人たちがスキル、能力を磨くという意味で、いわばシステム全体、そしてそこでの全体的な政策について語るということであって、ただ単に一つの教科、あるいは一つの活動だということではございません。

どんな手段になるのか私どもは存じませんが、他の関係者、例えばユネスコは将来について、もう既に考えています。

→パワーポイント [18ページ2番](#) を参照

ユネスコとしては、私どもが教えることとしまして、レジリエンス、強靱性のある人間を育てると同時に、変容し得る制度を構築し、またイノベーション、最適化、バランスやウェルビーイング（幸福）をもたらすべきだということふうに言っております。

日本語では福祉と最後に書いてありますが、ただ単に例えば福祉、健康、あるいは幸せといった限られたもののことではありません。ウェルビーイングといい、これをぴたりと一言で表せる日本語はございませんが、そこにおいては価値をもたらす、地域社会において自らの場所を見つける。また同時に、将来において貢献し得るという意味を含める言葉として、選んでおります。

そして 2 番パワーポイントの右側に今、見ていただいているものが、どういったことに目を向けていったらいいのかということです。何が重要かというのは国によって、異なってくるというふうに思います。例えば東京のような街においては、災害リスク軽減といったものが重要になってくると思いますが、そういった側面は、英国ではまだ必ずしも東京ほど重要ではございません。

しかしここに、環境においてはとても大きなことがあって、一つは多様性が失われているということ。また、もう一つが気候変動であります。私どもとしては、どのように持続可能に暮らせばいいのかといったことがまだ分かっておりませんし、持続可能なライフスタイルは何であるかといったことがまだ分かっていないということで、大きな課題があります。

今、世界各国、数多くの人たちがパリに集合し、会議を開催しております。そこでは、例えば気候変動に対して、また持続可能な開発に対する目標、ESD といったことに関する教育について語られています。



→パワーポイント 19ページ3番 を参照

そしてここに書いてあるのは、以前開催されたりオ+20の国連会議において、それぞれ発言した内容をまとめておりますが、なぜ教育が重要であるかというふうに捉えた発言を示しております。

しかし、私自身ここで書いてあることで十分だとは決して思っておりません。確かに教育、教員訓練を拡充したり、また持続可能を中心とするカリキュラムを生み出したり、持続可能に関する分野といったものは重要であります。声明文を出せば事足りるということではなく、さらにもっと他の面での前進が必要だと思っております。

そこで私どもがすべきことのひとつというのは、ホールスクールアプローチです。つまり、ホール（包括）といった意味での教育を施す必要があり、若い人たちが持続可能な発展のために備えができるような教育を施す必要があります。

私どもとしては、英国における教育制度を変えようと試みてきたのであり、それに対して運動を展開してきたのであります。と同時に、全ての学校が英国ではESDを実施しなければいけないといった法的要件に関しても、変えていこうと思っています。

→パワーポイント 19ページ4番 を参照

その一つのやり方としては、学校そのものに対する考え方を変えて、いわばホールスクールアプローチといったものをESDに対して実施することです。

有名なアインシュタインの言葉を思い起こしていただければ、ただ単に昨日の考え方のみに基づいて、今日の問題も明日の問題も解決することができるはずはないと。

です。私どもとしては、ホールスクールアプローチといったものが必要であり、これが形成されることによって変容する教育というものを実現します。そこではただ単に新しいスキルを会得すればいいということではなく、新しい考え方、考え方そのものを変えていく必要があります。

→パワーポイント 20ページ5番 を参照

このホールスクールアプローチというのは、皆さまが仕事をするにあたって、ただ単にリーダーなりチャンピオンなり、一人の先生がいれば、その人に依存すれば事足りるということでは決してなく、学校全体が動いて取り組まなければいけないということです。

15年ほど、私自身がホールスクールアプローチに携わってきたのであり、それは英国世界自然保護基金(WWF-UK)あるいは委員会、あるいは持続可能性と環境教育(SEEd)において実施してきたわけですが、そこでいろいろな活動を見てきました。その結果、このホールスクールアプローチといったものを通じて、ただ単に活動だけではなく、それをきちんと計画し、論理的な形で仕事を、あるいは勉強を行い、またカリキュラム、プロセス、全体を変えるにあたって、このホールスクールアプローチが役立つということを体験してまいりました。

また同時に、こういったアプローチを取ることによって、サステナビリティといった持続可能性、全ての側面に対応することができるのであります。サステナビリティという言葉は極めて広義であり、極めて規模の大きな概念でありますから、ただ単に物理的な環境というだけではなく、私たちの世界の社会、経済、文化的側面全て網羅するということです。その際、ホールスクールアプローチを取ることによって、これら全てに対応できるのであって、ただ単にその内の一つ、二つに対応すればよいということではありません。

また併せて、これは何を意味するのかと言いますと、学校そのものが学ぶ



組織になっていくということです。一見すると不思議に聞こえるかもしれませんが、学校というのは生徒さん、いわゆる学ぶ側がいるわけですが、必ずしも学校というのは何かをするにあたって、どのようにすればよいのかということ学習する組織ではなかったと思います。

なぜそういったことを言うのかといいますと、理由は二つございます。つまり、どのようにしたら、持続可能な形で生活し、また仕事をすべきかといった教科書がまだ存在していないからであります。

子どもは全員が学んでいかなければなりません。教授であろうと、先生であろうと、学習者、保護者、ビジネス、社会、いずれも全てが持続可能な形で生活し、また仕事をしていくということを学んでいかなければなりません。

私自身も今、学習中でございます。1か月ほど前、夫と一緒にエコハウスを買ったばかりでございますが、このエコハウスをどのように使えばよいのかということ、まさしく今、学習しております。

もう一つの理由といたしまして、なぜ学ぶ組織であるべきなのかといいますと、OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 結果を見ますと、自ら行動を取って研究し、学ぶ先生がいれば、その学生のスタンダードがさらに高まるといいう結果が出ております。

→パワーポイント [20ページ6番](#) を参照

そこでESDを採用し、ホールスクールアプローチを実践している学校というものがあつたならば、どのようにしてその学校がそうだと認識することができるのか。つまり、学校に一度足を踏み入れたら、そこで何が見られるだろうか、ということを考えてみました。

まず、どの科目であろうと、ESDの教育アプローチが取られていることを

ご覧になれると思います。

また二つ目としては、カリキュラムの中の持続可能性の論理的な前進として、例えば1年生から6年生、あるいは7年生、そして最終学年に至ってどういったことが起きているのか。また同時に、児童生徒が学ぶ場において、何を会得しているのかということを見ていくことができると思います。

このホールスクールアプローチというのは実際に学校で使われ、学校全体において活用する枠組みです。ただ単に校長室に掲げてある枠組みのことはございません。

またその学校におけるエートス、あるいは原則と申しましょうか。そういったものをご覧いただけるということです。学校として、どんなビジョンを掲げて、どんな使命感を持って行っているかといったことを見ていただくことができると思います。しばしば、私はこの学校間でまとめられた価値、例えば、どのように彼らがそれらの価値を説明し、やってみせているのかに関して見てきました。

WWF-UK にいたとき、政府を説得し、3年間にわたる時系列的な継続調査を行いました。それは持続可能な学校でそれが実践されていたならば、学習者にどういった影響があるかということ、3年間追跡調査するというものでした。

そして、そこで分かったことは、明らかに学習者は持続可能な開発に関して説明できたわけですが、それより大事なことは、彼らが何をしているのか、どこで学んだのか、





何のために学んだのかということを知得していたということです。

そして、そこで見たのは、地域社会なり学校において、行動を実践するプログラムに参加している学習者であって、そこで一番うまくいったのは、「問い」から始まるような形で挑むやり方でした。

そして、それ以上に大事なこととしていつも自問自答していることは、本当にこれは持続可能な開発について実践されているのだろうかということです。その答えとして、例えば子どもが環境における制約の中で暮らしているのだろうか。また同時に、現在と将来の世代のための社会正義というものが含まれているのだろうかといったことが問いに対する答えとして含まれていなくてはなりません。この二つがない限り、サステナビリティに関する学習とは言えないからです。

→パワーポイント [21ページ7番](#) を参照

ここにおいて、いくつかそのアプローチなり、活動なり、教育学として、何を教えて何を学んでいるのかといったものを列記しておりますが、一個人の社会的な批判的な思考をしているのか。また、この変化を理解するというのは環境における変化、また社会における変化を理解しているのだろうか。

そしてその学習活動の中には、例えば野外活動。そして典型的な学習として、例えば社会制度についての学習が含まれると同時に、活動的な学習、社会的な学習も含まれます。昨日ですが、東京にある学校を視察させていただき、そこで保護者、教員、児童と異なった人たちが一緒になってどのように豆腐を作るのかについて共に学ぶ場を見学いたしました。この最後の参加的というのは、学習者自らがコントロールし、例えばどのようなプロジェクトを行うのかといったことも学習者が決め、またどんな問題が懸念事項なのかということも学習者が決めていくということを意味します。

この参加的ということは、学校にとって実践するのは難しいことだと思います。

ます。自分自身、かつて教員でございましたのでそれを体験しております。先生がたにとっては、これは大きな変化であって、学習者に物事を決めさせるというのはなかなか難しいことではございますが、一度実践されますと、なんと素晴らしい結果かと驚かれることだと思います。

→パワーポイント [21ページ8番](#) を参照

このホールスクールアプローチに対する見方の一つは、計画に対する枠組み設定をし、また学校としてのやり方を定め、そして学習者が本当に持続可能なモデルに則ってやっているかといった成果物を評価するということがあります。

子ども WWF-UK の活動について、2005年に英国で初めて世界初の持続可能な学校フレームワークというものを実践いたしました。そこではエートスという精神は、いわば気遣いの精神であり、自分に対して、また他者に対して、そして環境に対して思いやるということです。

→パワーポイント [22ページ9番](#) を参照

そしてこの持続可能な学校フレームワークには三つの流れがあり、キャンパスであり、カリキュラムであり、コミュニティということで、学校における全ての分野を網羅することが大切です。そして、広く学習しそして繋がっていくことも含まれています。もし一度でも皆さんがエートスを持つならば、ホールスクールアプローチをつくり出すことができます。

→パワーポイント [22ページ10番](#) を参照

さて、組織化するにあたって、八つのトピックを選びます。私どもとしては、英語ではドアウェイ、日本語としては入り口と訳されております。八つの入り口と。

この八つの入り口というのは、2005年当時の政府の政策であったわけで





す。グローバルな側面、地域の福祉、建物、敷地、食料と水、多様性、参加、旅行、交通、エネルギーと水。一番の右の所ですが、説明が欠落していることにさっき気付いたのですが、これが英語では Resources and Waste、資源と廃棄物であります。

英国政府はこのサステナブルスクールということに関して、もはや一切関わらなくなったのですが、私と17の組織と一緒にサステナブルスクール・アライアンスというものをつくりました。

それが何を意味するのかと申しますと、私どもが独自の入り口を使っても構わないということで、必ずしも上記の八つの政策に従う必要はないということで、私どもとしては新たな生物多様性と自然といった入り口を設けたのであります。

ーパワーポイント [23ページ11番](#) を参照

一つこのESD、あるいは環境教育において気になることがございます。それは、評価するにあたって、ただ単にいい気分だということでは事足りないということです。自分たちが行い、子どもたちもやるのが大好きで、自分たちがよくやったと思ったとしても、それだけでは評価とは言えないのです。

つまりここにおいて自問自答すべきことは、どんな変革を自分がもたらしたのだろうか。今現在、自分たちは持続可能性のない形で生活している現状からどういうふうになれば、将来、持続可能な形で暮らせるように持っていくことができるだろうか。

そして私とその結果、政府を説得したのは、このインパクトに対して、研究を成果物としてまとめることであり、ここに書いてある持続可能な学校のインパクトというのを見ていったわけでありまして。つまり、評価に対する研究をレビューしたわけです。

ーパワーポイント [23ページ12番](#) を参照

また、2010年に行ったものですが、ここで五つの効果というものがあります。この研究に関してはホームページに掲載されておりますので、ぜひご覧ください。その中でも重要なものの一つは、政治家にとっても政府にとっても、また保護者にとっても大切な1番目の学校の改善であります。

ご存じないかもしれませんが、英国は西ヨーロッパ諸国の中で若い人たち、若い人といっても4歳以上のことですが、最もうつ病の発症率が高い国であり、彼ら、彼女らは将来に対して、環境に対して、また自らの安心、安全に対して心配しています。

もう一つ、その持続可能な社会と将来ということに対して全体的なホリスティックなアプローチを取るということであつたならば、そこでは子どもたちが学んだこと、そして、いろいろな科目を結びつけていく必要がでてきます。

そこにおいて大事なのは、例えば教育であろうと、数学であろうと理科であろうと、地理、歴史、環境学であろうと、子どもたちが学ぶにあたって地球の中で、また人間として、また環境といったシステムの中でこれら全てを理解していくことが大事だということです。

そして、サステナブルスクール、あるいはホールスクールアプローチというのは、若者の参加を促すということであって、それはただ単に学校における参加だけではなく、後に自らの人生において参加していくということを含むものであります。

そして4番目というのは、学校の活動、考え方、生活に貢献する。これは文字通り自明だと思います。

この5番目は、サステナブルスクールにとっては重要です。学校という



のは、たとえサステイナブルな学校であっても決して完璧な場所ではなく、そこは学ぶ場であると同時に、持続可能のために学習するという意味で、持続可能性をモデル化する場所でもあります。

その活動を始めるにあたって、人々が気付くこととしては、自分がさらに何ができるだろうか。どのようにしたらさらにできるのだろうか。と問うていくわけであります。そこではサステイナブルスクール、あるいはホールスクールアプローチというものが一つのやり方ではありますが、これは私自身が記した本であり、SEEdのウェブサイトでアクセスしていただくことができます。テーマとしては、学校がどうしたらさらに持続可能になるかといったことを書いております。

ーパワーポイント [24ページ13番](#) を参照

その証しとして出てきたのが、今ご覧いただいておりますポイントであります。これを実践することによってサステイナブルスクール、また、より持続可能にしていくにあたって、より簡単にできるということです。

ーパワーポイント [24ページ14番](#) を参照

6番と8番、10番に関して議論したいと思います。

6番の実践の領域は特に重要です。というのは、学習者が異なったことを勉強するにあたって、どのようにそれをつなげていくのか。また、学習者が学んだことと実際の社会とをどのようにつなげていくかということです。併せて、異なった将来になっていくわけですが、それに対してどういったビジョンを持つのかということで、括弧でもしもと書いてありますが、もしもこうだったならば、どうなるだろうかということで、例えば暗い将来や社会ではないようなビジョンというものをどのように描けるかということです。

そしてコミュニティ、また社会において、地域社会を巻き込んで変革をもたらす必要があると思います。サステイナブルスクール、ESDといったもの

を学校において、目に見えるような形で提示する必要があるということです。目に見える形にすることによって、保護者や地域社会とそれを共有し、学生が、また学校が何を達成し、何を努力しているのか、またどのような結果を達成したのかといったことを可視化していただきたいということです。

もちろん言うまでもなく10番。先生がたをサポートする。

3週間前、ギリシャのアテネにいたのですが、そこでキプロスにおけるサステイナブルスクールのリーダーの方にお会いしたのです。この国においては、初めて全ての学校にサステイナブルスクールを実践すべきであると義務化し、それが11月4日のことでした。多分、世界初の試みではないかと思っています。

ーパワーポイント [25ページ15番](#) を参照

なぜかと言いますと、サステイナブルスクールというものをダイナミックな制度であると捉えると同時に自ら組織化し、そして相互に作用すると同時にどんどん進化し、どんどん発展するものであると位置付けているからです。それらは必ず教員をサポートしていくものとなるでしょう。

ーパワーポイント [25ページ16番](#) を参照

追加情報を望まれる方は、ここにアドレスも書いてありますので、ここにアクセスしていただければ、政府が行っているサステイナブルスクールに関する情報が全て網羅されております。また、ご質問があれば、一番最後に私の連絡先が書いてありますので、Eメールを送っていただいても結構です。どうもご清聴ありがとうございました。

<http://se-ed.co.uk/edu/>

<http://sustainable-schools-alliance.org.uk/>



SEEd - Supporting education for a more sustainable world

# ESDの ホールスクールアプローチ


アン・フィンレイソン  
SEEd 事務局長




パワーポイント1番

以下を見据えながら教える

- レジリエンス(回復力)
- 変容
- イノベーション
- 最適化
- バランス
- 福祉



- 生物学的多様性
- 気候変動教育
- 防災
- 文化的多様性
- 貧困削減
- 男女平等
- 健康促進
- 持続可能なライフスタイル
- 平和と安全保障
- 水
- 持続可能な都市化など

持続可能な開発のための教育 

パワーポイント2番



SEEd - Supporting education for a more sustainable world

リオ+20の成果文書には持続可能性を教育に盛り込むことがコミットメントとして明記されている。

我々は、若い世代は未来を担う世代であること…を認識する。従って我々は、教員訓練の拡充、持続可能性を中心とするカリキュラムの開発、持続可能性関連分野での…訓練プログラムの開発、…持続可能な開発を追求する人材を育成するための教育システムの能力を向上させることを決意する。

(環境省仮訳)



パワーポイント3番



SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## ESDを達成するためになぜ ホールスクールアプローチが必要？



パワーポイント4番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## 5つの理由:

1. 変容的教育 – 新しいスキル、新しい考え方
2. 学校全体で活動を継続 – 1名の支持者だけではない
3. たくさんの活動から、全校生向けの計画的に順序があるカリキュラムへ
4. 持続可能性の全体像を見る – 環境、社会、経済、文化
5. 自分の行動：何が効果的か研究し、学ぶ



パワーポイント 5番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## 学習活動

- 社会的な批判的思考
- 変化を理解する
- 野外学習
- 体系的学習
- 活動的学習
- 社会的学習
- 参加的



パワーポイント 7番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## どうやってホールスクールアプローチを見分ける？

- 全クラスで教え方が目に見える
- 全学年で順序性があるカリキュラム
- 全校でフレームワーク使用
- 基本精神が見える
- 児童生徒が学校のESD活動について説明できる
- 児童生徒が地域や学校の活動に参加している



パワーポイント 6番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## 計画・開発・評価のために フレームワークを使用する

### 「UK 持続可能な学校フレームワーク」

気遣いの精神 –  
自分・他者・環境のことを思いやる



パワーポイント 8番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## UK 持続可能な学校フレームワーク

このフレームワークには3つの流れ:

- キャンパス
- カリキュラム
- コミュニティ

と  
8つの入り口がある

パワーポイント9番

## 入り口 (持続可能性のテーマ)

エネルギーと水

建物・敷地

食料と水

資源と廃棄物

旅行・交通

多様性・参加

地域の福祉

グローバルな側面

SSA Sustainable Schools Alliance

パワーポイント 10番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## 持続可能な学校のインパクト (効果)

パワーポイント 11番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## インパクト (効果)

1. 学校の改善: 若者の学習や福祉の向上
2. 若者の学習体験を結びつける
3. 若者の参加を発展させる
4. 学校の活動、考え方、計画に貢献する
5. 持続可能な行動・考え方・計画の模範を作る

DCSF 2010

パワーポイント 12番

# YOUR GUIDE TO BECOMING A MORE SUSTAINABLE SCHOOL

持続可能な学校になるためのガイド

Sharing best practice, top tips, sector expertise and examples of Green Schools Revolution in action to inspire sustainability in your school

[www.greenschools.coop](http://www.greenschools.coop)

GREEN SCHOOLS  
REVOLUTION  
from the Cooperative

グリーンスクール革命のベストプラクティス、ヒント、専門知識、事例を共有しあなたの学校の持続可能性にひらめきを与えます



パワーポイント13番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

1. どこからでも始められる！
2. すでに実施していることを確認する
3. ホールスクールアプローチを発展させる
4. 各児童生徒の持続可能体験のための計画を立てる
5. 計り、計り続ける
6. 連携、「もしも...」
7. 児童生徒たちが完全に参加するよう促す
8. ビジュアル化して共有しよう
9. 変化を理解し、見守る
10. 先生をサポートする

14

パワーポイント14番



SEEd - Supporting education for a more sustainable world

## UNECE ホールスクールアプローチ 政策提言

ホールスクールアプローチによって学校を学びの組織に変えることができる。それは活動的および自立していて地域と交流しながら変容し、さらに進化していく組織である。

[https://www.unece.org/fileadmin/DAM/env/Information\\_document\\_4\\_school\\_planning\\_02.pdf](https://www.unece.org/fileadmin/DAM/env/Information_document_4_school_planning_02.pdf) UNECE: 国際連合欧州経済委員会

パワーポイント15番

SEEd - Supporting education for a more sustainable world

詳細情報：

[www.se-ed.org.uk](http://www.se-ed.org.uk)

<http://sustainable-schools-alliance.org.uk/>

連絡先：

[ann.finlayson@se-ed.org.uk](mailto:ann.finlayson@se-ed.org.uk)

パワーポイント16番



## コーディネーターからのコメント ①

永田 佳之（聖心女子大学文学部教育学科教授）



今日はアン・フィンレイソンさんをお迎えできて、本当にうれしく思います。「ESDの10年」の間、ユネスコ本部でモニタリング評価専門家会合という世界中のESDの動きをモニターする委員会のメンバーを仰せつかっていましたが、フィンレイソンさんはその会合で何度も言及されていました専門家です。自国にフィンレイソンさんをお呼びして、お話を聞きたいという専門家は少なくありませんでした。そういうフィンレイソンさんを今日、ここにお招きして、今までのご経験を通してESDの最前線に触れるということ、とても貴重な機会だと受け止めています。

この後、ワークショップに入りますが、日本の状況とイギリスの状況、または欧州の状況はそれなりに少しずつ違います。そこを踏まえて、ワークショップのときに皆さんが心に留めておいていただければという要点を先ほどフィンレイソンさんとの打ち合わせの際に書き留めておきました。それを今、皆さんとシェアしたいと思います。

まず、「ESDの10年」についてということです。10年が終わってもうESDは終わってしまうのではないかなという声もちらほら聞

きます。2015年11月のユネスコ総会に併せて開かれた「ユネスコ/日本ESD賞」の表彰式に出席しましたが、世界のESDはその心配とは逆に盛り上がっています。総会で各国からESDに関する発言がたくさん出てきたということは、ユネスコ本部にとってもESDというのは根付いているのだと少し驚きをもって受け止められていました。または馳文部科学大臣が「ユネスコ/日本ESD賞」として、三つの団体を表彰しました。エルサルバドルとグアテマラで活動をしているAsociación SERES、インドネシアのThe Centre for Development of Early Childhood, Non-Formal and Informal Education、そしてドイツのrootAbilityです。1団体5万ドルずつを奨励金として授与されました。このような賞を通して、各国に日本の貢献もアピールできまし、その3団体がどういうふうこれから世界のESDに貢献していくかという役割を担ったわけです。このように世界ではESDの新しいフェーズが始まっています。セカンドステージとよく日本では言われますけれども、ユネスコでは「スケールアップ」とこの時期を呼んでいます。これまでの基盤の上でさらなる拡充をしていく5年間だということです。ただ、スケールアップするには、根付かないといけません。団体ばかり大きくなるのではなく、根をしっかりと張っていかないとなりません。それを今、考えようということが世界中の課題ではないかと思

います。そこで始まったのがESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)です。その中に五つの領域がありますが、今は時間がないので五つの「優先行動領域」については言及しません。そのうちの一つである「ホールスクールアプローチ」は「ESDの10年」が始まる前から10年後まで一貫して主張され、最も強調されてきた領域だと思

います。ホールスクール、またはホールコミュニティ、文書ではホール・インスティテューション・アプローチと書いています。これは裏を返せばそれはどこの国でもなかなかし得なかった、定着し得なかった世界的なESDの課題です。ですので、とても重要なチャレンジです。

日本に帰って校長先生がたにホールスクールアプローチをやってくださいとご説明すると、うちはやっていますという返事がほとんどでした。何をやっているのかをご質問すると、学校全体計画がありますからということでした。または年間計画がありますからということで、そうですか・・・と私が答えるという会話になってしまいます。しかし、ホールスクールというのは、今日、フィンレイソンさんのお話にあるように、計画とは違う決定的な要素を持っているのだと思います。そこで、今日はそのお話と具体的なアイデアをシェアしていただいたのではないかと思います。

ホールスクールは学校計画や年間計画ではありません。では何なのかというと、フィンレイソンさんのお話を簡単にまとめると、取って付けたようなESDではないということです。内在化するというのを英語でinternalizingと言いますが、ESDの価値を内在化することです。学校という組織、先生、校長先生にESDの価値を内在化していくということです。そして、学校では授業を越えてESDに挑まなくてはいけないということです。総合学習でESDをやっているからと満足してはいけないということです。それから、地域ではプロジェクトを越えてESDで取り組んでいくということです。勝手に私はこれを「学校丸ごとESD」、「地域丸ごとESD」などと使っていますが、丸ごと取り組んでいくということです。つまり、学校のビジョンやフィンレイソンさんのお話にあったように方針や指針、授業の方法、内容、教材など、あらゆる側面を変容させるということです。つまり、学習関係だけではなく、変容の対象は、校舎の素材や校庭、食べ物から交通手段にまで至ります。例えば遠足でどのように旅行に行くかなど、全て関わってきます。つまり、「どこを切ってもESD」と言えると思います。そこに向かって、この5年間、取り組んでいかななくてはいけないということが1点目です。

2点目は、学校の文化です。ホールスクールをやると、学校の文化に

までアプローチしなければいけないということが世界的に言われるようになりました。つまり、今日のキーワードはエートスです。講演の中でフィンレイソンさんはethosとおっしゃっていましたが、エートスを変えていく、変容させていくということです。言い換えれば、よく言われる「隠れたカリキュラム」に自覚するということです。われわれは当たり前だと思っているけれども、実は学校以外から見ると当たり前ではないものが学校にはたくさんあると思います。そういった隠れたカリキュラムへのチャレンジでもあるということです。つまり、学校では当たり前のものをいったん括弧に入れて、その意味を一つ一つ洗い出していくということが求められているということです。

先ほどご講義の中にもありましたけれど、イギリスの学校文化のコアな概念、サスティナブルスクールのエートスは何でしょうか。どこを切っても見えてくるというものです。「ケア」ですね。和訳は「気遣い」でしょうか。自分へのケア、地球へのケア、自然へのケアということです。あとは他者。隣の他者です。もちろんクラスメートもそうですし、見知らぬ他者へのケアもあります。例えば、シリアやアフリカの子どもたちなど、見知らぬ他者もそうです。学校を構成する全ての要素にケアというものが機能していくということです。つまり、どこを切ってもケアが読み取れるということにイギリスはチャレンジしたわけですね。では、日本の場合は何になるのでしょうか。それを次に皆さんに考えていただきたいと思います。

最後ですが、これは自戒を込めて私が強調したいところです。フィンレイソンさんのお話で、ご自身がエコハウスで暮らされて、パートナーと一緒にサスティナビリティを考えているというくだりがありました。とても素晴らしいお話だと思います。私はこれを、ESDを語る人、実践する人自身がESDを体現しなくてはならないというメッセージとして受けとめました。それは、各先生、校長先生、管理職の人々ということです。また、イギリスの場合は事務職員まで入れて、その説明書ま



できています。事務職員のバーサーという会計を担当している人にもESDのサステナブルスクール用のガイドができています。そこまで細かくできているのです。

つまり、これまでの10年よりも教師や校長先生にも自分がサステナビリティを学び続ける、実践するといった持続可能な未来につながる自己変容が強調して求められるということです。ESDが教育史上残した功績として、「自己変容と社会変容のための学び」ということがあります。自分が変わって、社会全体が変わるということです。自分が変わらずに社会に持続可能になりなさいというのは調子がいいことで、その時代をもう終わりにしましょうということです。ESDを語るのであれば、まず先生一人一人が変わっていくことです。自分のできることを考えていき、そして、クラスが変わり、学校全体が変わっていくということです。校長先生もしかりということです。自己変容、そして社会変容ということを一一人が考えていく時代になっています。それを日本でまずは学校単位で、地域単位でどう考えていくかというのが切実な課題ではないかと思います。

今日はご自身のお話も含めて、もっとエコハウスなどについてもお聞きしたいのですが、時間も限られていますので、ここで一回、ワークショップの前の説明は終わりたいと思います。早口ですみません。ありがとうございました。



## ワークショップ 1

### ホールスクールアプローチについて考えよう

‘ホールスクールアプローチ’と聞いて、何を想像しますか？  
自分たちのイメージするホールスクールアプローチについて絵を描いてみよう。



### “8つの入り口”を使っての ホールスクールアプローチ分析

“8つの入り口”を使って、みなさんの学校の状況をおさらいしましょう。  
将来のことではなく、今行っていることをご記入ください。また、記入したところに、現在のステータス（はじめたばかり、普通、良くやっている）も明記しましょう。

なお、全てに記入をしていただく必要はありません。空白欄にはそれぞれの学校で独自に行っていることを記載しても良いでしょう。

	キャンパス	カリキュラム	コミュニティ
エネルギー			
旅行・交通			
食料と水			
水			
建物と敷地			
グローバル・シチズンシップ			
参加			
購入と消費			
生物多様性と自然			
学校文化			
ガバナンス			



## サポートネットワーク構築 英国の経験から

アン・フィンレイソン（持続可能性と環境教育 SEEd 事務局長）

→パワーポイント [40ページ1番](#) を参照

「ESD はいつスタートしたのか」という質問がございました。実はESD はイギリスでスタートしたのです。私が行ったわけではありませんが、WWF-UK によって1987年にスタートしました。

そして、90年代の半ば頃から WWF-UK によってこのホールスクールアプローチを模索し始めました。

イギリスにおいて、この WWF-UK が行おうとしたことは、ネットワークをいかに構築するかを学ぶということでもあります。そのネットワークを構築することによって、ESD、あるいはホールスクールアプローチをサポートしていくために、非常に役に立つわけです。

過去25年間、政府においても非常に大きな変化がいろいろとありましたが、また同時にこのESDに対する関心という点でいっても、非常に大きな変化がありました。

サステナブルスクールは、持続可能な学校は2005年にスタートしました。

2010年にイギリスでは、政権交代がありまして、それによって2011年にサステナブルスクールをサポートすることを政府側がやめたわけです。

したがって、私どもとしては政府に働きかけてロビー活動を行って、政府の態度を変えていこうとしようと思ったのですが、なかなか政権側はそうはしてくれなかったのです。

だからこそ2011年に、300以上の組織が協議をして、このサステナブルスクール・アライアンスをつくったわけです。

最初にスタートしたとき、このサステナブルスクール・アライアンスが開始したときは2011年3月ですけれども、100人ほどが集まりました。

これによってネットワークを構築したわけです。ちょうど今日と同じような形で100人ほどがこういった部屋に集まってネットワークを作ったわけです。

しかし2年間は特に何も起こりませんでした。

その2年間で何とか組織運営を行い、そのネットワークとしてやっていくために資金を調達しようとしたからです。

一つの問題は、その500組織と申しましたけれども、そのうちのほとんどが非営利団体、NPOなのです。

しかもそのときちょうど景気後退の時期でしたので、政府からの助成金にしても、研究のための資金にしても、お互いに営利団体同士がそれを獲得するために競争しなければならないという状況であったからです。

したがって私はリサーチを行いまして、サステナブルネットワークというモデルを見つけました。

つまり、経営に入ってもらって、コーディネーターを採用したわけです。コーディネーターは1週間に1日働いてもらうのですが、無償ではなく、給与をもらう形で働いてもらうようにしたわけです。

そういったことをしたいと考えたので、手紙をいろいろな所に書いたわけですが、そうするとすぐに20ぐらいの組織からそれで構わないと、イエスという答えが返ってきたわけです。

そして3年たちましたが、現在では毎年4回会合して、彼らがむしろコントロールしていきたいというふうに、自立的になっています。

このサステナブルスクールのネットワークによって、みんなが一緒に協力をしていこうという体制になり、政府に働き掛けるための、ロビー活動をするためのキャンペーンも行っていくという体制になりました。

→パワーポイント [40ページ2番](#) を参照

いろいろなタイプのネットワークが今までにあるのですが、私どもの経験で言うと、こういった教訓があります。

ちょうど今日のこの会合と同じように、皆さんに理由があって、そして目的



を持って一緒に集まっているわけです。

そこで何が大事かと言うと、そういった学校、そして先生がたが集まっているわけですから、従って時間を有効に活用するために短縮し、そして役に立つ、また、楽しいものにしていくということが大切です。

その中心に能動的な学び、そして研究というものを置くことによって、学びをより深くすることができ、実践ということにつながりやすいわけです。

そしてそのネットワークをローカル化して、場合によっては全国ネットワークにも参画していくということです。

リーダーシップの共有をシェアすることも大事です。

その際にはコーディネーションが大事です。これはなかなか普段気が付かないことですが、一緒に行く人の人数を集めて、みんなが一緒に集まるようコーディネートするのは非常に大変な取り組みです。

そしてそのネットワークが終わったら、あるいはタスクが終わったらもう一度新たなネットワークを始めようということです。というのは、ネットワークというものは永遠に続くものではないからです。

→パワーポイント [41ページ3番](#) を参照

そのうちのいくつかの例を紹介したいと思います。

これはイギリスではまだスタートしたばかりなのですが、ティーチミーツ (Teach Meets) というものがあります。

これはSNSを活用するものでありまして。実はイギリスでは、Facebook よりも Twitter を先生がたがよく使っていらっしゃるのです。

日付、時間、そしてそのテーマを選びます。そして、そのイベントを Twitter を介してみんなに告知します。

その際に、先生がたがスピーチを7分間、もしくは3分間かということで選んでもらうわけですが、そこにサインアップすると。その際に何を話してもらうかということ、その先生の考え、アイデア、あるいはどういう教訓があったか、あるいはどういうアプローチをしたか。そのような話をしてもらうわけです。この時間は2時間あり、もちろん軽食も出ます。非常に速いと思います。

→パワーポイント [41ページ4番](#) を参照

ぜひ皆さんにも考えていただきたい質問が二つあります。

その二つは何かといいますと、実際に何をよくしたいのか。そして何を試したいのか。ということです。

→パワーポイント [42ページ5番](#) を参照

ローカル化の話ですが、これはイギリスで非常にうまくいった成功例として学校クラスターがあります。

これは五つ、ないしは六つくらいの学校が一緒になって、ある一つの課題、アイデアと一緒にやっていこうという取り組みであります。そして、リーダー的な役割を果たすリードスクールを決めて、そこがいろいろなオーガナイズ、あるいはコーディネーションをローカルでやっていくということですね。

ちょうど今日のミーティングと同じように、今日のミーティングの形態も非常に良いと思うのですが、先生がたがいらして、そしてその先生がたをサポートする。あるいはその学校をサポートしていく、いわゆるステークホルダーがいるわけですね。

こういうことを行うとき、とかく難しいのが、実際に何をそこで学んだか、あるいは例えば事例、ケーススタディがなかなかそれ以外の所に共有されていないということがあります。例えば、黄色の服を着る人たち以外がそういっ



た面でのお手伝いをする。他の学校と、すなわち集まった学校以外の学校とも協力するためにいろいろと学び、ケーススタディを共有していくわけです。

リーダーシップの共有という4番目の話ですが、これはどういう意味かといえますと、その役割を分散したほうが良いということです。1人とか1個だけに限られないようにしていくことによって、実際の調査でもそのように共有していったほうが調査でもうまくいくということが分かっています。続いていくということですね。

それから学校から出てくる人たちも、例えば1人だけというのではなくて、2人以上のほうが望ましいということが分かってきました。2人いれば、1人は学校のリーダー的なシニアのポジションの方。そしてもう一人は、実務をする方。そういう形で取り組んでいくと続きやすいということです。

永田先生もおっしゃっていましたが、そのスクールカルチャーが変容していくということをそういう形でまさに見てきたということが挙げられます。

これは先生がたにとっては大変で、なかなか難しいのですが。というのも、先生がたは非常にお忙しいですから。

→パワーポイント [43ページ7番](#) を参照

しかし、何といてもここが肝心なところでありまして、そういった情報を共有していくということ、シェアしていくということです。そしてそれによって、ESDに関して学んだことを他の人たち、他の学校にも教えていく、そして伝えていくということが大切です。

こういうところを標準的にやってきたのですが、イギリスでもう一つうまくいっていることとして、大学生の活躍があります。

イギリスではよく大学生がボランティア活動を行います。もちろん勉強もしますが、ボランティア活動に積極的に参加しています。そして、このボランティア活動の一環として学校でボランティア活動をするということです。

持続可能性、このサステイナビリティに関して、大学生は非常に強い関心を

持っています。

そして皆さんが学んだこと、あるいはそういった事例、ケーススタディ等を他にも共有して、広げていくということに関して、そういった大学生たちが手伝ってくれるということが非常に多いわけです。



# サポートネットワーク構築

## 英国の経験から

**アン フィンレイソン**  
SEEd事務局長



パワーポイント1番



## ヒント

1. 目標があり、便利、時短、楽しい
2. ネットワークの中心にアクション学習・研究を置く
3. ローカル化
4. リーダーシップの共有
5. コーディネーション!
6. 終わったら  
—また新たなネットワークを始めよう



パワーポイント2番



## 1. 目標があり、便利、時短、楽しい

例 英国の「テーチミーツ」

ツイッターで日時とテーマを共同で選び、会場となる学校をおさえ、ツイッター上でイベントを宣伝。参加者は活動・アイデア共有の7分間/3分間プレゼンをする。  
2時間 5~7PM 軽食



パワーポイント3番



## 2. ネットワークの中心にアクション学習・研究を置く

何をよくしたい？  
何を試したい？




パワーポイント4番



### 3. ローカル化

例 学校クラスター

1校が調査・共有したいトピック・アイデアを選ぶ。アイデアに興味をもった地域の他校が、中心核となる学校と協働するため集まり話し合う。  
5,6校が放課後に集まる



パワーポイント5番



### 最後に

学んだことを共有し、  
他者にも行動を起こすよう促す

会議  
ニュースレター  
ブログ  
先生のためのオープンハウス



パワーポイント7番



### 4. リーダーシップの共有

リーダーシップの役割を分散し、1名、1校だけに限られないようにする  
経験の長い教員が務めるのがベスト

### 5. コーディネーション

時間と手間がかかる。Sustainable School Allianceはメンバー全員が  
コーディネーターへの謝礼を持つことで機能する。

### 6. 終わったら

—また新たなネットワークを始めよう  
新しいアイデア・プロジェクト・ネットワーク



パワーポイント6番



### 詳細情報

[www.se-ed.org.uk](http://www.se-ed.org.uk)

<http://sustainable-schools-alliance.org.uk/>

### 連絡先

[ann.finlayson@se-ed.org.uk](mailto:ann.finlayson@se-ed.org.uk)



パワーポイント8番

### ワークショップ 2

## あなたの学校・組織で ホールスクールアプローチを展開しよう

他の方がまとめた「8つの入り口」を見て、あなたにとって新しいアイデアは何でしたか？また、さまざまなアイデアを見て、そこから新しい気付きが生まれましたか？

ホールスクールアプローチやESDをより多くの学校で実践されるためにはどうしたら良いでしょうか。

ホールスクールアプローチやESDの質を上げるためにはどうすれば良いでしょうか。

### 会場の声

- ・サステナブルマップを各学校で作し、学校の良さを共有
- ・ESD実践事例を共有をするときは、優劣はつけない
- ・実生活に基づいた課題設定
- ・学校と地域の人と一緒に企画
- ・教員の意識改革
- ・教育の変容
- ・子どもの変容を共有する
- ・企業等との連携
- ・生き抜く力を身に付けるための防災教育
- ・子どもから学校、そして地域を巻き込んでいく

など





## コーディネーターからのコメント ②

永田 佳之 (聖心女子大学文学部教育学科教授)



ありがとうございました。そして皆さまも本当にお疲れさまでした。短い時間でしたけれども、とても凝縮した時間だったのではないかと思います。

今日はホールスクールというキーワードと、もう一つはネットワークというキーワードを学びました。この二つに共通しているものは何だと思いませんか。今日のフィンレイソンさんのお話で、ホールスクールとネットワークに共通していることがあります。内発的、自発的な発展ということです。双方ともに自発的、内発的に自らのネットワークを構築して、自らの質を高めていくというツールであり、構想であります。

ホールスクールについては、イギリスの「8つの入り口」を皆さんは今日、体験しました。多分、日本で初めての試みです。皆さんの地域では、8つ、3つ、15、または持続可能な開発目標(SDGs)のように17なのではないでしょうか。そして、どんなトピックのドア、入り口になるのでしょうか。それをぜひ考えてみてください。

もう一つ、自分たちならではのドアを決めるのと同じぐらいか、多分もっと大切なことがあります。それは8つ、または3つ、15のドアを

束ねるビジョンは何かということです。言い換えれば、複数のドアに共通する根は何かということです。イギリスの場合はケアでした。ケアが8つに共通している根です。どこを切ってもイギリスのサステイナブルスクールはケアが見出せることが期待されています。学校菜園という切り口でも、学級経営という切り口でも、サステイナビリティケアが見られるということです。日本の皆さんの地域の場合は包括的な概念になると思いますけれども、根は何になるのかをぜひ考えていただきたいと思います。

国際的には、実は今日、皆さんが体験したものは世界中の共通課題です。ESDのこの10年を振り返った最も高いチャレンジ、または課題は何かというと、ESDの断片化をどう乗り越えるかということです。または、矮小化をどう乗り越えるかという課題です。海外の学校でも、うちは総合学習をやっているからESDだと言っているところがあります。またはグリーンカーテンを作ったからESDをやっているという学校もあります。あるいはコミュニケーションスキルの訓練をしているか



らESDだという学校もあります。日本だけではありません。そういった段階はグローバルアクションプログラムのこの5年間で卒業しましょうということが世界的なチャレンジです。今日は、この10年間の壁を乗り越える具体的なヒントをたくさんいただけたと思います。本当にフィンレイソンさん、ありがとうございました。

実は「8つの入り口」は、とても複雑です。150点満点で採点できるなど、とてもよくできているんですが、実は複雑だということです。現在、私の研究室で貴重なドキュメントの全訳を二つしているのですが、来年には皆さんに日本語で読んでいただけるようになるかと思っています。日本ならではの使い易い版を創造する時の参考にしていただければと思います。

それから、ネットワークについてお伝えします。皆さんのお手元に今、岡山で策定した「ESD推進のためのユネスコスクール宣言」があるとあります。ESDを追求するためのユネスコスクール岡山宣言です。そこには、「自発的なネットワーク」という言葉があるとあります。また「内



発的な評価」という言葉もあります。イギリスの経験は、まさに自発的なネットワークを、政権交代を機に自分たちで立ち上げ、運営するようになったという好例です。その宣言文は適当に作ったわけではなくて、ユネスコスクールの皆さんの声に傾聴を重ねて、ACCUの事務局と一緒に専門委員の方が作り上げていったものです。ですので、ぜひ、日本でも「自発的なネットワーク」づくりというものをイギリスから学んで、生かしていただければと思います。

もう一つ、お伝えしておくべきことは、相互扶助、つまり相互に助け合うための組織であるということです。今のイギリスの政権は、フィンレイソンさんを前にしてこういうことを言うのはとても複雑な気持ちになるのですが、ESDの発展にとっては逆風だと思います。とても今、つらい状況の中で、立派に仕事をされているのがフィンレイソンさんです。

そういう政策の中でも、サステナブルスクールの実践が続いていけるのは、ネットワークがあるおかげだと思います。先ほどフィンレイソンさんにそのことを聞いたら、自分はそれを狙っていたわけではないけれど、ネットワークがあるから自信を持てるという現場の先生の声をいただいているそうです。まさにフィンレイソンさんがおっしゃっていた不確実性の時代ということです。災害も起こるし、経済恐慌も起こるし、いつ何が起こるか分かりません。そういう時代ですから、若者も先生も不安を抱えています。そういう時代に必要な共同体が相互扶助的なネットワークなのだと思います。環境の学習のイニシアチブ(Environment and Schools Initiatives, ENSI)という団体がヨーロッパにはあります。まさに効率性重視に傾倒した欧州の政策の中で、学校が本当の持続可能な未来につながる発展とは何かという視点で、現場を守ってきた団体です。フィンレイソンさんの持続可能性と環境教育(SEEEd)もその団体です。つまり、現場の先生がわれわれの味方だという実感をもって捉えている団体です。日本にはそういう団体がもう少し必要ではないかと思っ

ております。社会や経済がどのような状況になっても持続可能な未来につながる学校に役立ち、学校を守っていくという機能について、欧州の経験から学ぶことができるのだと思います。

最後になります。私も何年か ACCU の活動に関わらせてもらって、「ESD の 10 年」を振り返ると、要所要所に ACCU が招へいした専門家の活躍を見てとることができます。10 年のスタートに基調講演をしたのはソンバット・ソンボンさんというラオスの NGO のマグサイサイ賞の受賞者です。その次、例えば、チャールズ・ホプキンスさんは世界宣言を去年、名古屋で読み上げた方です。そして、コナイ・ターマンさんは南太平洋大学の先生で、ESD を内発的に作るというメッセージを持った専門家です。日本に最初にこういった先進的なメッセージを持つ専門家の方々を招へいしたのは、実は ACCU でした、それは「10 年」の大きな貢献となりました。

いま挙げた専門家の方々と同様に、フィンレイソンさんから託された今日のメッセージも新しい GAP の 5 年、そして次の 10 年につながる一つの始まりになるのではないかというふうに予見しております。こうした期待に十分応えていただける今日のヒント、そしてアイデア、ビジョン、思想だったと思います。私自身も今日いただいたメッセージを大切に温めていきたいと思っておりますが、ぜひ皆さんもこれを機に本日の収穫をより稔り多きものとなるように各地で交流を深めていっていただきたいと願っております。ありがとうございました。



日本の方を対象にしたワークショップを行うのは初めてで、どのようなワークショップになるのか不安もありましたが、各テーブル 5 人～6 人の方々が活発に活動に参加している姿を見て感激しました。ポストイットや模造紙にアイデアを書き始めるのがこれまで見てきた中で一番早かったです。参加者が主体的に参加し、他者にアイデアを共有したいという思いがあり、そして他者のアイデアを必要としていたのだと思います。参加者が何を話しているか分かりませんが、表情やボディーランゲージから読み取ることが出来ました。

参加者の皆さんへ一番伝えたいことは、ワークショップの場に流れていた「積極的な意識」を忘れないで欲しいということです。どのようにしたら小規模な形でそれぞれの状況に合った「積極的な意識」を作り出せるか、考えていただきたいと思っております。考えることが今回のワークショップの成果を持続させる有効な方法です。知識を作り出したり、ケーススタディーを作り出したりするより、ネットワークを作るための前向きな気持ちを持つことのほうが重要なこともあります。

ワークショップで行なった内容は ESD のアプローチに基づいたものでした。つまり ESD は能動的な学びであり、参加型であり、未来に向けた思考であり、システム思考であり、前向きなプロセスであり、希望にあふれた教育であると、改めて感じましたし、それらの要素がこのワークショップ会場にあったと思います。

## プロフィール Profile

### アン・フィンレイソン

持続可能性と環境教育 (SUSTAINABILITY AND ENVIRONMENTAL EDUCATION, SEEd) 事務局長。30年以上にわたって、主に学校教育を通して、地域全体を持続可能にする、ESD に従事する。これまでに2014年愛知県名古屋市で採択されたグローバルアクションプログラム推進におけるユネスコ本部のパートナーとしても活躍中。イギリスではサステイナブルな学校づくりに取り組み、ESDの具体的な評価のあり方、ホールスクールアプローチについて実践を行う。

### 永田 佳之 (聖心女子大学文学部教育学科教授)

ESDの専門家として、国連ESDの10年を国内的、国際的に牽引し、世界的な視野で国際的な潮流を日本国内外につなぐ役割を果たす。ユネスコ本部のESDモニタリング評価に専門家として従事。2014年に岡山市で開催されたユネスコスクール世界大会で採択された「ユネスコスクール岡山宣言」採択までの代表責任者となり、加盟校の教員の声に傾聴しながら同宣言をまとめた。

## 第2章

# 加盟校の先生からの提案

- ユネスコスクール加盟校主体のネットワーク強化に向けて



## ユネスコスクール加盟校主体の ネットワーク設立について

ユネスコスクール全国大会前日の2015年12月4日に開催されたこのワークショップは、ユネスコスクール加盟校の先生数名と一緒に企画の段階から準備を進めてきました。その中のお一人である多摩市立多摩第一小学校校長の棚橋先生からこのワークショップにかける思いの共有、そして加盟校主体のネットワーク設立に向けての提案がありました。

ユネスコスクール事務局

みなさんこんにちは。多摩第一小学校の棚橋です。今日のユネスコスクール全国大会プレイベントの開催に向けて、何名かのユネスコスクール加盟校の教員で集まって、なんとかしなければという思いで今日の準備をしてきました。そのために文部科学省の扉をたたいて、何度か協議をし、お願いをしてきました。ユネスコスクール事務局でもあるユネスコ・アジア文化センター（ACCU）にもお願いをしてきました。聖心女子大学の永田先生にはアン・フィンレイソンさんを紹介していただき、深い学びがあり感謝しています。

「なんとかしなければ」ということをよくよく考えていく中で、今

1,000校になろうとしているユネスコスクールがさまざまな地域で支え合っているところがあれば、そうでないところもある。自分の学校だけでがんばらないといけない、支援がない、何をしたいかわからないという学校もたくさんあると聞いています。孤立した学校をほっていくわけにはいかないだろうと考えました。このままでは明日の問題を解決できない。黙っているわけにはいかない。ユネスコスクールとして自立をしないといけないという思いもあります。それを文部科学省の扉をたたきながら、行き着いたのが、ユネスコスクールのネットワークです。ネットワークを作って、情報の共有をしよう、つながるということができたなら、たとえば何をしても良いかわからないということがあっても地域のネットワークで支えることもできる、事例の共有もできると考えました。

地域で集まって支え合う、地域のネットワークがすごく大事だと考えています。まず既存のネットワークを含めた各地域のネットワークがあって、地域ネットワーク同士がゆるく、大きく結びついた結果、全国のネットワークとして機能すればユネスコスクール1,000校の活動が充実すると思います。今後、学習指導要領が変わります。ユネスコスクールやESDの役割が今まで以上に期待されると思います。「ユネスコスクールはこんなことをやっている」ということを胸をはって言うことができるように、ユネスコスクールを支えるネットワークを構築したいと思いました。

永田先生のお話で、ユネスコスクール岡山宣言が挙がりましたが、この宣言にネットワーク構築について示されているのです。宣言に書かれているからというわけではありませんが、宣言が採択された2014年にはネットワークの必要性が話題に挙がっていたわけです。

そこで、具体的にネットワークを作り出す一歩をここで踏み出した

と思います。つまり具体的なネットワークを作るための合意を得たいのです。賛成いただけますか？

--- 拍手！ ---

ありがとうございます。それでは、各テーブルで「こういうネットワークを作りたい」といったことを意見交換しませんか。そして、皆さんと共有しましょう。

< 12月4日ワークショップ参加者からのアイデア >

#### ネットワークの目的

ユネスコスクールの活動をサポートするためのネットワーク作り  
情報の共有  
ESD の指導の充実と研究  
学校をサポートするステークホルダーの存在  
目標があり、時短で楽しい！  
他のネットワークとの連携

#### 参加者のネットワークに関するアイデア

地元のネットワーク構築、強化  
学校間でつながるネットワーク  
都道府県を超えた教員同士の交流  
学校で ESD を始めるときの有識者派遣  
ユネスコスクールネットワークを活用して悩み解決  
同じ課題がある学校同士がつながり、ステークホルダーともつながる  
専門性を共有するネットワーク（ESD 実践を始める学校が具体的な事例を参考にするために）  
ESD らしいネットワークの追及  
ESD が日本の教育のスタンダードになるためのネットワーク  
加盟校の自発性と教育委員会との協力

## 第3章 ユネスコスクール事務局から



## ユネスコスクール事務局にできること

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は2008年から文部科学省からの委託を受け、日本のユネスコスクール事務局として国内外ユネスコスクールネットワーク強化・推進を行っています。

### ユネスコスクール、ESDに関する情報発信を行っています。

ユネスコスクール公式ウェブサイト運営し、ESD優良実践事例、ESDの教材、ユネスコスクール、ESDに関する研修の情報等を発信しています。

### 国内外のユネスコスクールをつなぎます

ACCUは日本と世界の橋渡しとなるようなユネスコスクールの事務局として、質の高いユネスコスクール活動をサポートしています

### 国内外の交流相手校をご紹介します

交流したいテーマ等をご連絡ください。日本国内はもとより、海外のユネスコスクールも斡旋します。

海外ユネスコスクールと交流をご希望の場合、こちらのページにアクセスしてください。

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/startexchange.jp/>

### 国際協働学習プロジェクトを企画運営しています

アジア太平洋地域のユネスコスクールとともに、「お米」や「食」をテーマに持続可能な社会づくりの担い手を育むプロジェクトを行っています。学校のある地域の課題に児童生徒が主体となり取り組み、地域社会との連携をとりながら、変化の担い手として活躍す

るプロジェクトです。学びの経過や成果を学校内はもとより、地域の方々そして、海外の仲間にも共有します。教職員を対象に、ESDのコンセプト、プロジェクトの全体像について理解を深めてもらうワークショップも行っていきます。

### 教職員を対象とした交流会・研修会・ワークショップを実施しています。

海外からもESDの専門家を招へいしています。2015年度はイギリスのSEEdから事務局長のAnn Finlaysonさんを招き、ホールスクールアプローチについて、ネットワークを構築することについてのワークショップを開催しました。

### ACCU職員を貴校に派遣します。

ESDについて、途上国での教育支援についてなど、ご要望をお聞きして、児童生徒、教職員を対象にしたワークショップ・講演を実施します。



### ユネスコスクール公式ウェブサイト：

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/>

E-mail: [webmaster@accu.or.jp](mailto:webmaster@accu.or.jp)



## ESD推進のための ユネスコスクール宣言

(ユネスコスクール岡山宣言)

2014年11月に岡山大学で開催されたユネスコスクール全国大会で採択

### 私たちにとってのESD

私と、あなた、学校のみならず、地域のみならず、世界のみならずへとつながっていく。  
だから、私は、見えないあなたと励まし合い、支え合える存在であるという尊さに気づき、  
何か行動したくなる。

教室から校庭へ、校庭から地域へ、地域から私の国へ、  
私の国からあなたの国へ、そして世界へ、地球へ、私の世界は広がっていく。  
だから、私は、どこ場所にもかけがえのない宝が息づいていることに気づき、  
何か行動したくなる。

今と、過去とのつながり、明日とのつながり、遠い未来とのつながり。

今の私は過去や未来とつながっていく。

だから、私は、この大きな時間の流れのなかで、

たいせつな責任を負っていることに気づき、何か行動したくなる。

(児童の変容を児童の視点から叙述したユネスコスクール教員による「詩」にもとづく)

ESDのビジョンを取り入れることで、子どもたちの学びのなかに、さまざまなつながりが生まれます。他者、世界の多様性、いのちある地球、自然、科学・技術、文化、過去および未来などと自己とのつながりです。こうしたつながりのなかで、学びは深まり、子どもたちの心のなかに生き続け、持続可能な未来を創造する力となります。その力は行動と協働を呼びおこす力です。そして、問い続け学び続ける力です。

### 日本のユネスコスクールによる「国連ESDの10年」の成果

日本におけるユネスコスクールは、1953年に、ユネスコが世界の学校でその理念を実現する事業を開始した当初から日本の学校が参加して、今にいたります。日本では、学習指導要領や教育振興基本計画などに持続可能な社会の構築やESD推進の観点が盛り込まれています。日本ユネスコ国内委員会「ESDの普及促進のためのユネスコ・スクール活用について(提言)」(2008年2月)によって、ユネスコスクールは、ESD推進の拠点として位置づけられました。ESDのビジョンと、ユネスコスクールの目的に共感した教師と学校を支援する人々や組織によって、ユネスコスクールは飛躍的に仲間を増やし、現在国内807校を数えます。全国のユネスコスクールによって、学校教育におけるESDの裾野は大きくひろがりました。「国連ESDの10年」を通して、ユネスコスクールでのESDには、多くの成果が見られるようになりました。

各ユネスコスクールのESD実践では、平和、環境、生物多様性、エネルギー、人権、国際理解、多文化共生、防災、文化遺産、地域学習などを入り口として、取り組むべき課題を、体験的・

探究的に発見し解決していくためのプロジェクトやカリキュラムが開発されました。各教科のなかだけでなく、総合的な学習の時間等を有効に活用しそれらを関連づけながら、ESDは実践されてきました。

地域の特徴を活かしたESD実践を通じて、子どもたちは、地域社会が人と人とが支えあって成り立っていることを深く理解し、地域の良さと抱える課題を知り、未来に伝えるべきこと、あるいは変革すべきことを地域の人々とともに考え、行動に移すことを学ぶことができました。さらに、地域社会が抱える課題と、国やアジア、世界の課題とはつながっており、地理的な隔たり、世代や立場の違いを超えて協働することで持続可能な未来をつくることができるという認識が共有されつつあります。

子どもたちは、地域社会や世界のさまざまな課題を自らの問題ととらえ、協働的に学ぶなかで「生きる力」を育み、未来社会の担い手であるという意識をもつことができました。ESDによる体験を伴う理解と科学的な考察は、批判的な思考力と判断力、コミュニケーション能力を鍛え、自ら、また協働して、持続可能な未来をつくるための行動に役立つことが理解されました。

ESDのビジョンに導かれた教師の意識に変容が生まれました。知識を伝達するばかりではなく子どもとともに学びながら、子ども中心の学びをデザインし、コーディネートする教師の姿勢は子どもたちを変え、子どもたちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるという実例が見られるようになりました。社会に対する無関心、自己肯定感の低さが問題とされる日本の子どもたちの内なる力を発揮させ、自信の獲得につながりました。そして、学校間の交流によって、より深い学びが実現してきました。

さらに、学校と教育委員会、保護者や地域の人々、NGO/NPO、企業、大学、専門機関とのあいだに連携が深まり、ESD実践の質を高めてきました。また、世代を超えて学ぶことの喜びを確認することにつながりました。

2011年3月11日に起こった東日本大震災は甚大な被害をもたらしました。しかしESDが根づいていた学校や地域では、そのことが被災からの立ち直りに大きく貢献し、国内外のネットワークを通じて被災地に多くのあたたかい支援の手が差しのべられました。地域の再生と創造にむけてESDを基本理念とした創造的な復興にむけた教育が行われつつあります。

### 日本のユネスコスクール：私たちのコミットメント(誓い)

私たちは、日本の教育を変えていく原動力としてESDをこれからも進めていきます。

私たちは、持続可能な未来のために、身近な地域に貢献するとともに、グローバルな視点に立って行動する次世代を育みます。

私たちは、平和、環境、気候変動、生物多様性、国際理解、多文化共生、エネルギー、人権、ジェンダー、防災、文化遺産、地域学習、持続可能な生産と消費等、学びの入り口やテーマが何であれその先に地域、国、アジア、世界の平和と持続可能性を見据えて、地域の人々をはじめ多くの人々と協働しながら、つながりを意識した教育を実現します。

私たちは、ESDの本質を理解するとともに、ESDの魅力を広く社会に伝えるため、児童生徒

の変容、教師の変容、学校・地域の変容を明確に示します。

私たちは、気候変動、生物多様性、防災、持続可能な生産と消費など、国境を越えたグローバルな課題について理解し、解決方法をさぐり、解決に向けてともに取り組んでいく国内外のユネスコスクール、特に近隣のアジア諸国のユネスコスクールとのテーマ学習・協働学習に取り組みます。

私たちは、互いに学びあい、活動の質を高めていくために自発的に組織されるユネスコスクール同士の全国ネットワークをつくります。そして、ユネスコスクール間の交流や協働を推進し情報交換・活用の仕組みを充実させます。

私たちは「変化の担い手」として子どもと教師を捉え、地域社会における持続可能性の実践者となるように努め、他の学校、社会教育・生涯学習機関、NGO / NPO、自治体など多様な主体とともに、持続可能な地域づくりに貢献します。

私たちは、さまざまな主体との対話と連携を通して、「国連ESDの10年」の後継プログラムである「ESDに関するグローバルアクションプログラム(GAP)」の5つの優先行動分野をつないでいきます。

私たちは、世界181の国にひろがるネットワークの一員として、ESDに取り組み、持続可能な未来をともに築いていくことを、そしてそのために、さまざまな交流と連携の機会をつくって学びあうことを、日本と世界のユネスコスクールに対して呼びかけます。

### 学校によるさらなるESD推進：ユネスコスクールからの提案

ESDの推進拠点としてのユネスコスクールの経験、成果と課題にもとづき、私たちのコミットメントをより良く実現するために、また、ESDをユネスコスクール以外の学校へ、地域へと持続的にひろげていくために、ユネスコスクールとすべての学校、その支援者に向けて、以下を提案します。

教師や子どもたちの主体的な発意やアイデアを尊重し、創造的な授業づくり、教科横断的で探究的な教育課程づくりによって学校全体でESDをすすめる。

ESDを通した子どもたちの学びの質や育ちを内発的に評価する方法など、ESDの成果をモニタリング・評価するための方法を検討し、共有する。

各学校のESDを持続的に支える政策や制度をつくり、また校長のリーダーシップがESDの特徴をいかした形で発揮できる基盤を整備する。

教師や教育関係者が自らの専門性を生かしながらローカル/グローバルな視野で持続可能性についての認識を深めるための研修制度を拡充させていく。

地域において、学校を含む多様な主体が持続可能な社会づくりに参加し連携・協働できる仕組みをつくる。

子どもたちはどの子も無限の可能性を秘めています。その可能性を輝かせることができるよう質の高い教育を行っていくことは、世界中すべての教師に共通する願いです。さらに子どもたちを見守る保護者や地域の人々の願いを共有し、平和で持続可能な未来をつくるために、ESDをともに推進していきましょう。

2014年11月8日

ユネスコスクール世界大会・第6回ユネスコスクール全国大会(岡山市)-参加者により採択

## ACCUの紹介



### 人をつなぎ、知をはぐくみ、未来をひらく

ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は1971年に日本政府と出版界を中心とした民間の協力によって設立されました。設立以来、ユネスコのうたう「平和は、人類の英知と精神的な連帯のうえに築かれるものである」という精神のもとに、アジア太平洋地域諸国の教育と文化の分野でユネスコや各国関係団体と協力して、人材の育成と相互交流を促進する事業を行っています。

### ACCUのビジョン

ACCUはアジア太平洋地域において、誰もが平等に自らの意志で参加できる学びの基盤づくりを促進し、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献します。

### 活動分野

教育事業	国際交流事業	模擬国連事業	文化事業
国内外でのESD普及促進	教職員のための国際交流 (韓国、中国、タイ)	高校生のための模擬国連事業	文化遺産保護 専門家庭教育



# Let's think about the future of UNESCO Associated Schools

– as the focal point for promoting ESD, that has expanded,  
deepened and become more connected

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD

-Current Status and Way Forward





## Introduction

A workshop on the quality improvements of UNESCO Associated Schools entitled “Think about future UNESCO Associated Schools” (FY 2015 Japan/ UNESCO Partnership Project, Organisers: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, JAPAN and Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)) was held on 4th December 2015, the day before Japan’s National Conference on UNESCO ASPnet.

The workshop consisted of two sessions. In the first session, the participants learnt about the whole school approach from Ms. Ann Finlayson, an ESD and sustainable school expert invited from UK. In the second session, based on the suggestion of teachers from UNESCO Associated Schools, who participated in workshop planning, to “establish and mutually learn through a domestic network,” the participants exchanged opinions about what they wanted to accomplish through the network. The summary of the workshop is compiled in this volume.

UNESCO Associated Schools are the member schools of the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet). The Schools implement the ideals of UNESCO that are enshrined in the UNESCO Constitution. ASPnet spans the world. These schools are positioned as the focal point for promoting Education for Sustainable Development (ESD) in Japan by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and the Japanese National Commission for UNESCO.

A passage in the Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools

in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD adopted at Japan’s National Conference on UNESCO ASPnet held in Okayama in 2014, the final year of the United Nations Decade of Education for Sustainable Development (DESD), specifies the need to “illustrate the transformation of students, teachers, schools, and communities through ESD to understand the heart of ESD and to spread the ESD vision”. A clue to the quality improvements of UNESCO Associated Schools may be provided in this passage.

Intrinsic and voluntary perspectives are necessary for transformation. During the workshop held on 4th of December, the participants spent over five hours learning from each other in a positive and exciting atmosphere. We believe that people reading this volume can also obtain ideas and information about learning that will bring about internally-motivated transformation.

We hope that learning with transformation is implemented in many schools and communities through mutual learning among all the people who read this volume.

Secretariat Office for ASPnet schools in Japan

## Let's think about the future of UNESCO Associated Schools

–as the focal point for promoting ESD, that has expanded, deepened and become more connected

### Table of CONTENTS

Introduction..... 66

#### Chapter 1

**Keynote Talk and Workshop** ..... 69

- Whole School Approaches to ESD ..... 70

- Creating Support Network  
Experience from the UK ..... 98

Ann Finlayson

(Executive Chair, Sustainability and Environmental Education)

Coordinator: Yoshiyuki Nagata

(Professor, Department of Education, University of the Sacred Heart, Tokyo)

#### Chapter 2

**Suggestions from Teachers of UNESCO Associated Schools**

- Towards the further strengthening of  
UNESCO Associated Schools ..... 117

#### Chapter 3

**From the Office of UNESCO Associated Schools**..... 121

## Chapter 1

### Keynote Talk and Workshop





# Whole School Approaches to ESD

**Ann FINLAYSON**

Executive Chair,  
Sustainable and Environmental Education



Thank you very much for inviting me to Japan. I am very delighted to be here, and very much look forward to learning more about ESD activities here as Japan has been at the forefront of ESD during the past decade.

—Please refer to the [Slide 1 on page82](#)

I will talk about whole school approaches to Education for Sustainable Development. I would like to start by saying I am talking about education **for** sustainable development, not education **about** sustainable development.

It's not a subject. It's not an activity. It's a whole system: building the skills, capacity and competency of young people to deal with an unknown, and hopefully, sustainable future.

This is a future we do not yet know, but other people have thought about it. UNESCO has thought about it.

—Please refer to the [Slide 2 on page82](#)

UNESCO thinks we should be teaching with a view to: Building resilience

in young people, building transformation in our education system, building innovation, optimization, balance and well-being.

The last of these points, which I think is the most important, is well-being. By well-being, I mean not just health, not just happiness, but your sense of value, your sense of place in your community, and your sense of contributing to society in the future.

You can start education for sustainability by exploring a number of lenses. It depends on what country you are in and it depends on what is important to you. Obviously in Tokyo, disaster risk reduction is important, but it may not be quite so important yet in the UK.

There are two big environmental crises at the moment. One is loss of biodiversity, and the other is climate change. What we really do not yet know is how to live sustainably. So sustainable life styles is another important topic.

Right now, many people from around the world are meeting in Paris. They are talking about education, and education for climate change, Sustainable Development Goal Four, and ESD.

—Please refer to the [Slide 3 on page83](#)

This is an example of a commitment from the Rio+20 Summit, and the statements that people made about why education is important.

Many people think this is enough. I think that enhanced teacher training, development of curriculum and development of training programs are important, but I do not think it is enough to just make statements. I also



think there are other ways to make progress.

One of the things we have to do is think about the whole education system. We have to think about reorienting the whole education system to prepare young people for sustainability.

We can try to change the whole education system. That is one of the things we are trying to do in the UK. We have a campaign to change the legal requirement for all schools that they must commit to ESD.

–Please refer to the [Slide 4 on page83](#)

One of the ways to realise this goal is to change the way we think about the school itself, and to implement a whole school approach to ESD.

You may know this quote from Albert Einstein: “we cannot solve today’s problems or tomorrow’s problems with thinking from yesterday”.

What we need is a whole school approach because it will enable us to implement transformative education. This means new skills, but more importantly, new ways of thinking.

–Please refer to the [Slide 5 on page84](#)

A whole school approach also helps you sustain your work. It means that you do not rely on just one leader, one champion or one teacher. It means the whole school works together.

In my 15 years of working on sustainable schools, both at WWF-UK (World Wildlife Fund), the Sustainable Development Commission, and SEEd, I have seen many schools conduct activities. The whole school approach

helps you move from activities to a planned and logical way of working so that the student experiences it throughout their education through the curriculum and through an ongoing learning process.

It is also the best way to help you see all of sustainability. Sustainability is very big and very broad concept. It includes the environmental, social, economic, and cultural aspects of our world, and this approach helps you do all of that.

It also means that the school itself becomes a learning organisation. That might sound very odd, but what I mean is that often schools have learners, the students, but the school itself is not a learning organisation. It does not learn how to be something new – in our case, a Sustainable School.

There are two reasons why I say this. The first is that the textbook for living and working sustainably has not yet been written.

We are all learning. From professors, teachers, students, parents, businessmen and women, to society, we are all learning to live and work sustainably.

I am learning myself at a moment. For example, I recently bought an Eco-House with my husband and I am learning how to make an Eco House work.

The second reason why it is important to become a learning organisation is that the OECD and PISA research results show that teachers that do their own action research have improved standards for their students.





–Please refer to the [Slide 6 on page84](#)

I thought about how would I recognise a school that takes a whole school approach to ESD. If I walked into such a school what would I be able to see?

Firstly, I think you would be able to see ESD teaching approaches in any class.

Secondly, you would be able to see the logical progression of sustainability within the curriculum from grade 1 to grade 6 or 7 to the final grade. You would be able to see what would happen each year and the learning journey that each student will experience.

A big part of whole school approach is a framework or a map, which you would see being used in school. This will not be just a framework in a principal's office but obvious throughout the entire school.

You would be able to see the ethos, or a set of principles, that the school follows. It could be a mission statement or vision for the school. Sometimes I have seen these values written up around the school with examples of how they are demonstrating those values.

When I was with WWF-UK, we convinced the government to conduct a longitudinal study that tracked students over three years. It was conducted in schools that were implementing ESD, to discover what effect ESD has on the students and their learning.

The study found that students could clearly explain what sustainable development meant. More importantly, they could explain what they

were doing in school, what they were learning, and why.

You should also be able to see students involved in community or school action projects. In particular, those that I thought worked the best were inquiry-based projects.

Above all, the question I always ask myself is "Is this really sustainable development?" The question has to be answered by "Does it involve 'living within environmental limits'? Does it address social justice now and for future generations?"

Without these two, it is not learning for sustainability.

–Please refer to the [Slide 7 on page85](#)

Here are some of the teaching and learning approaches, activities or pedagogy that we would expect to see if ESD was being implemented:

- Socially Critical Thinking
- Understanding Change - both in environmental and social aspects.





- Outdoor Learning
- Systems Thinking
- Action Learning
- Social Learning
- Participatory approaches

Much of learning for sustainability is system thinking, action learning, and social learning, which I saw yesterday in a Tokyo school. Parents, teachers, students, and others were all working together and learning how to make bean curd. One characteristic of social learning is many different ages learning together.

Finally, the best participatory approaches means the students are in control and make decisions about the projects they might work on based on the issues they are worried about.

I realise that students' participation is quite difficult to implement for schools and teachers. I was a teacher myself. It is a big change for the schools to place the students in a decision-making role. When you do it, it's amazing what happens.

–Please refer to the [Slide 8 on page85](#)

One of the ways that you can implement a whole school approach is to use a framework for planning, development of the school practice, evaluation of the outcomes for the student, and whether the school is modeling sustainability.

In 2005 in the UK, we started developing the sustainable schools initiative or framework. It was the first in the world, following on from the Pathways project from WWF-UK. We began with the ethos of care: Care for

oneself, care for others, and care for the environment.

–Please refer to the [Slide 9 on page86](#)

This framework had three areas of focus: campus, curriculum, and community, to make sure that you covered all areas of the school work and included the widest learning and engagement. This makes it a whole school approach once you have an ethos.

–Please refer to the [Slide 10 on page86](#)

It is organised with eight topics, which we called Eight Doorways. The Doorways were taken from government policy in 2005: energy and water, buildings and grounds, food and drink, global dimension, local well-being, inclusion and participation, travel and traffic, and resources and waste.

The UK government does not support the sustainable schools initiative anymore. Therefore, I myself and 17 other organisations created something called the Sustainable Schools Alliance.

This means that we can now make our own Doorways, without having to follow government policy. We have just created a new Doorway called Nature and Biodiversity.

–Please refer to the [Slide 11 on page87](#)

One of the things I have been very concerned about in environmental education and ESD, is what I have called the “feel good factor” in evaluation. We do ESD, the children love it, it feels good, but that is not evaluation.



We need to ask ourselves the question: “What change are we bringing about from where we are now living unsustainably? What change are we bringing about in young people so they can try to live more sustainably in the future?”

One of the things I convinced the government to do was to document some research on impact of sustainable schools. It was a review of evaluation studies.

–Please refer to the [Slide 12 on page87](#)

This research was conducted in 2010, and as a result, five main areas of impact emerged. If you would like more details, this research paper is available on the website. The first one is school improvement through ESD; this is very important to government, politicians and parents.

The UK, the highest levels of depression in young people age 4 years old and up in western Europe. Many of them are worried about the future, the environment and their safety.

The second finding is also very important. In order to have a holistic approach to thinking about sustainable development and the future, we have to bring together the different subjects.

Bringing together different subjects such as math, science, and geography and history and the environment, provides an understanding of how everything works as a planet, as a human, and environmental systems.

Sustainable schools and whole school approaches help develop young

people’s participation both in school and later in life.

The fourth finding is very clear: contribution to school, community, and family life.

The fifth finding is an important one. A sustainable school is not a perfect place. It is a learning place where you model sustainability and you model learning for sustainability.

One of the things we realised was that many people start with activities. Then, they ask themselves, “What more can I do?” or “How can I do more?” A sustainable school and a whole school approach is one way. This is a document that you can get from the SEEd website, which I co-authored on how to become more sustainable at the school.

–Please refer to the [Slide 13 on page88](#)

The evidence and research shows that there are ten things which enabled schools to become more sustainable.

–Please refer to the [Slide 14 on page88](#)

Here I would like to discuss briefly the sixth, eighth and tenth items.

The sixth practice area – ‘Connections and ‘what if’s..’ is very important. How do you make the connection between the different things students learn, or between the real world and what the students learn. Also, how can you imagine and envision a different future - can you imagine and envision a future different from a bad, scary, or an unsustainable one.

When you share your work and make it more visible you engage the



community. By giving your ESD work a prime place in the school you show how you value it. By sharing it with parents and communities everyone can see what you are trying to do and achieving as a result.

The tenth point: Support your teachers.

I was in Athens, Greece about three weeks ago where we met the sustainable school's leader for Cyprus. They had just made sustainable schools compulsory by law in every school in Cyprus on November 4. I believe they might be the first country in the world to implement such a policy.

–Please refer to the [Slide 15 on page89](#)


That's because they see sustainable schools as a dynamic system which is a self-organised, interactive community which evolves and keeps developing. They really are supporting their teachers.

–Please refer to the [Slide 16 on page89](#)

More information and resources are available on the SEEd website. There is also the sustainable schools website which has all of the government documents. You can also write to me with more questions. Thank you.


<http://se-ed.co.uk/edu/>

<http://sustainable-schools-alliance.org.uk/>



# Whole School Approaches to ESD


**Ann Finlayson**  
Executive Chair, Sustainability and Environmental Education



Slide 1


Teach with a view to:

- Resilience
- Transformation
- Innovation
- Optimisation
- Balance
- Well-being



- Biodiversity
- Climate Change Education
- Disaster Risk Reduction
- Cultural Diversity
- Poverty Reduction
- Gender Equality
- Health Promotion
- Sustainable Lifestyles
- Peace and Human Security
- Water
- Sustainable Urbanisation etc

Education for Sustainable Development



Slide 2



**The Rio+20 conclusions document included a clear commitment to build sustainable development into education:**

We recognise that the younger generations are the custodians of the future, ....We therefore resolve to improve the capacity of our education systems to prepare people to pursue sustainable development, including through **enhanced teacher training**, the **development of curricula** around sustainability, the **development of training programmes**.....[95]



Slide 3



## Why are Whole School approaches necessary to achieve ESD?



Slide 4



**SEEd – Supporting education for a more sustainable world**

**Five reasons:**

1. Transformative education – new skills, new thinking
2. Sustaining your work as a whole school – not just one champion
3. Moving from lots of activities to a planned, sequenced curricula for all students
4. Seeing the whole of sustainability – environmental, social, economic and cultural
5. Your own action learning and research into what works



Slide 5



**SEEd – Supporting education for a more sustainable world**

**How to recognise a whole school approach in any school?**

- Teaching approaches visible in all classes
- A sequenced curricula through all the grades
- Frameworks in use across the whole school
- An ethos is visible
- Students can clearly explain the ESD work of the school
- Students are involved in community/school action



Slide 7



**SEEd – Supporting education for a more sustainable world**

**How to recognise a whole school approach in any school?**

- Teaching approaches visible in all classes
- A sequenced curricula through all the grades
- Frameworks in use across the whole school
- An ethos is visible
- Students can clearly explain the ESD work of the school
- Students are involved in community/school action



Slide 6



**SEEd – Supporting education for a more sustainable world**

**Using a framework for planning, development and evaluation**

**The UK Sustainable Schools Framework**

An ethos of care – care for oneself, care for others, care for the environment



Slide 8

 SEEd – Supporting education for a more sustainable world

## The UK Sustainable Schools Framework

A framework with 3 organising strands:

- Campus
- Curriculum
- Community

and the 8 doorways:



Slide 9


 SEEd – Supporting education for a more sustainable world

## Evidence of Impact of Sustainable Schools




Slide 11

## Sustainability themes or doorways



SSA Sustainable Schools Alliance

Slide 10

 SEEd – Supporting education for a more sustainable world

## Impacts:

1. **Improving schools:** enhancing young people's learning and well-being.
2. Bringing young people's **learning experiences together.**
3. Developing young people's **participation.**
4. **Contributing to** school, community and family life.
5. **Modelling** sustainability practices, thinking and planning.

DCSF 2010



Slide 12

# YOUR GUIDE TO BECOMING A MORE SUSTAINABLE SCHOOL



P13

Sharing best practice, top tips, sector expertise and examples of Green Schools Revolution in action to inspire sustainability in your school

[www.greenschools.coop](http://www.greenschools.coop)

**GREEN SCHOOLS  
REVOLUTION**  
From The Co-operatives

Slide 13

**SEEd** – Supporting education for a more sustainable world

1. Get started – anywhere!
2. Audit what you are already doing + your champions\*
3. Develop your whole school approach\*
4. Develop a plan for every child's sustainability experiences\*
5. Measure it, and keep measuring\*
6. Connections and 'what if's..'
7. Get your students fully participating\*
8. Make it visual and share it\*
9. Understand and track change
10. Support your teachers

P14

14



Slide 14

**SEEd** – Supporting education for a more sustainable world

## UNECE Whole School Approaches – policy recommendations:

Whole school approaches can transform the school to a learning organisation; a dynamic system which is self-organised, interacts with the community, evolves and further develops.

[https://www.unece.org/fileadmin/DAM/env/Information\\_document\\_4\\_school\\_planning\\_02.pdf](https://www.unece.org/fileadmin/DAM/env/Information_document_4_school_planning_02.pdf)

P15



Slide 15

**SEEd** – Supporting education for a more sustainable world

For more information go to:

[www.se-ed.org.uk](http://www.se-ed.org.uk)

<http://sustainable-schools-alliance.org.uk/>

Or contact:

[ann.finlayson@se-ed.org.uk](mailto:ann.finlayson@se-ed.org.uk)

P16



Slide 16



## Coordinator's Comments 1

**Yoshiyuki NAGATA**

Professor,  
Department of Education,  
Faculty of Liberal Arts,  
University of the Sacred Heart, Tokyo



Thank you very much for your kind introduction. I am Yoshiyuki Nagata from University of the Sacred Heart, Tokyo. It is a great pleasure for us to welcome Ms. Ann Finlayson today. During the “United Nations Decade of Education for Sustainable Development (UN Decade of ESD, UNDESD)”, I had been a member of a committee at UNESCO Headquarters to monitor ESD trends around the world called the ESD Monitoring and Evaluation Expert Group (MEEG). Ms. Finlayson is an ESD expert who contributed many times to the Group. There are many experts who would like to invite Ms. Finlayson to their countries to hear her speak. Therefore, we consider that today is a very valuable opportunity for us that we can invite her and learn about the forefront of ESD through her experience.

Following my explanation, we will start the workshop. The situations in Japan and the UK or Europe are slightly different. Based on this, I wrote down some points to keep in mind during the workshop while meeting with Ms. Finlayson earlier. I would like to share these points with you now.

The first point is about the UN Decade of ESD. Some people say that ESD will end since that the Decade has now passed. I attended the “UNESCO-Japan Prize on Education for Sustainable Development” ceremony held during the UNESCO General Conference in November 2015 and contrary to those who hold these concerns, ESD has been energised worldwide. Many opinions about ESD were provided from a variety of countries at the General Session. UNESCO Headquarters considered with a little surprise that ESD has taken root. At the ceremony, Hiroshi Hase, the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, presented the “UNESCO-Japan Prize on Education for Sustainable Development” to three organisations: Asociación SERES, who carry out their activities in El Salvador and Guatemala, the Centre for Development of Early Childhood, Non-Formal and Informal Education in Indonesia, and rootAbility in Germany. Each organisation received \$50,000. Through this award, contributions made by Japan were showcased to other countries, and the three organisations will assume a role in contributing to ESD around the world in the future. Thus, we can see that a new phase of ESD has been started worldwide. UNESCO calls this phase “Scale up” while it is generally known as the “second stage” in Japan. This phase is for further expansion of ESD over the next five years based on the activities of the last decade. However, in order to scale up ESD, it must grow in size as well as firmly take root all over the world. I think that the main issue with global expansion is to come up with ideas how to realise it.

A programme called the Global Action Programme (GAP) on ESD has been launched to address this issue. GAP has five priority action areas. As there is no time today, I will not explain all of them, but I think that one of the five priority action areas, the “Whole school approach”, is the area which has been consistently maintained and most emphasised

before and during the UNDESD. The whole school approach is also called whole school, whole community, or the whole institution approach in documents. The whole school approach is a global ESD issue as well as a very important challenge that has hardly been achieved and established by any country as yet.

After I came back to Japan, I asked principals to implement the whole school approach. Most of them answered that their schools had already implemented it. Then I asked them what activities were carried out. They answered that they carried out activities according to the entire school plan or the annual plan, and the conversation was over. However, as mentioned in Ms. Finlayson's lecture, I think that whole school has elements which are crucially different from a plan. I think that we could share the elements of whole school and specific ideas to implement whole school today.

The whole school is not a school plan or an annual plan. According to Ms. Finlayson's lecture, it is not meant to be an outward ESD but rather to internalise the value of ESD, that is, the school as an organisation, teachers, and principal must internalise the value of the ESD. Schools must promote ESD even outside classes and must not be satisfied with a situation where they only implement ESD in the integrated study period. In addition, they must work on ESD in their communities, beyond their school project. I personally call this "Entire school ESD" or "Entire community ESD", which means to work on things together. That is, to transform all aspects of the school, such as the school vision, school policy and guidelines, methods and content of classes, and educational materials, as mentioned in Ms. Finlayson's lecture. Items subject to transformation are not only learning-related items but also materials concerned with school buildings, school grounds, food, and

transportation. For example, the means of transportation for school excursions is also subject to transformation. This could be called "ESD from every aspect". Efforts must be made towards it in the next five years. That is the first point.

The next point is about school culture. It is said globally that you need to approach the school culture when implementing the whole school approach. Today's keyword is "ethos" which Ms. Finlayson mentioned in her lecture. It is necessary to change and transform ethos. In other words, it is necessary to become conscious of any "hidden curriculum", which are often spoken of. There are many things in school which people other than school staff consider as uncommon while school staff consider them as common. These things are hidden curriculums to be challenged. That is, school staff are required to put those things that are considered to be common in school temporarily aside, and to clarify the meanings of each individual thing.

As mentioned in her lecture, the ethos of sustainable schools, a core concept of British school culture which can be seen in every aspect, is "care". Care means care for yourself, care for the earth, care for nature, and care for others including the people surrounding you like classmates and those you do not know. For example, children in Syria and Africa are also included in others. Care works for all elements of school. In other words, the UK tried to apply care to all the elements of school. What is the ethos of Japanese school system? I would like you to think about that next.

Finally, I have a point that I want to highlight through my own experience and in order to discipline myself. Ms. Finlayson mentioned in her lecture that she lives in an eco-house and thinks about sustainability together

with her partner. I think this is a great thing. I think of it as a message to the people promoting and practicing ESD that they must experience and realise ESD. People promoting and practicing ESD means teachers, principals, and school managers. In the UK, administrative staff are also included in such people and ESD guidelines for sustainable schools have been prepared even for administrative staff, such as the “bursar,” the person in charge of accounting. In this manner, ESD guidelines have been prepared according to duties in the UK.

This means it is emphasized that teachers and principals are required to change themselves by continuing to learn and practice sustainability even more than in the past ten years in order to work towards a sustainable future. One of the achievements of ESD in educational history is “learning for the transformation of oneself and society”. This means to change society by changing yourself. In other words, a sustainable society will not be created without changing yourself and the era when teachers do not change themselves should end. When promoting ESD, individual teachers must change themselves first. If they do what they can do, then classes and the entire school will change accordingly. This also applies to principals. Today is in an age in which individual teachers and principals must think about the transformation of themselves and society. I think that an urgent issue in Japan is to examine methods for the transformation of oneself and society by the entire school or community.

Although we would like to listen to more of her stories, including the eco-house, time is unfortunately limited. With that, I would like to conclude my explanation before the workshop. I’m sorry I talked quickly but thank you for listening.



# WORKSHOP 1

## How to start planning your whole school approach

There are 2 important starting points – one is visioning where you want to get to ie. a ‘sustainable school in the future’. The second is to build on what you already do by mapping current work and then identifying gaps and needs. Then you can develop an action plan and review it every year against the map or a framework.

Some key principles:

- involve everyone;
- make it fun and easy to join in;
- keep it somewhere public where everyone can see their ideas and work;
- make learning about becoming a sustainable school the core of your work
  - not becoming an expert;
- review your sustainable school work regularly with everyone.

Here are some activities to get you started:

### Activity 1

Think about the what a sustainable school might look like in the future  
 What do you imagine when you hear the phrase “whole school approach”? Include the school as part of the system it sits within – community, local authority, government. Draw the school as part of that system and with arrows all the influences and interactions.  
 What are the key words or values you are expressing in your picture? This could become your vision for the school.



### Activity 2

Mapping your current work using the Sustainable Schools Framework using the “Eight doorways” and campus, curriculum and community.

Write down the current activities (not in the future), and the current status of the activities (just started, moderately carried out, very experienced) in the same cell or box in the table ( see below).

It is not necessary to fill out all the cells for all the categories. The gaps will tell you where you could develop new practice, carry out some action research or work together as a network to develop new ideas and practices.

### The Sustainable Schools Framework:

	Campus	Curriculum	Community
Energy			
Travel and Traffic			
Food and Drink			
Water			
Buildings and Grounds			
Global Citizenship			
Participation			
Purchasing and Waste			
Health and Well-being			
Biodiversity and Nature			
Ethos			
Governance			
Others if any			



# Creating Support Networks

Experience from the UK

**Ann FINLAYSON**

Executive Chair, Sustainable and Environmental Education

–Please refer to the **Slide 1 on page104**

A History of the Sustainable Schools Alliance (SSA) UK network  
ESD started in the UK and maybe first in the world with WWF-UK, in about 1987.

Then in about the mid-1990s WWF-UK began exploring whole school approaches to ESD to see if this method helped sustain the work of the schools more effectively.

Finally, another way to support schools long term was to explore and learn about the role of communities of practice or networks.

In the UK over the past 25 years, there have been lots of changes in government as well as changes in interest in ESD. For example the UK government started the sustainable school initiative in 2005.

But in 2010, there was a change of government, and in 2011 they stopped supporting the sustainable schools initiative.

We could have lobbied to the government to change their minds but we understood they were unlikely to. So instead, in 2011, we and consulted 300 organizations and together created the Sustainable Schools Alliance. A hundred people met and launch in March 2011 to create the network, (just like 100 people in this room!)

But for two years nothing happened as we struggled to organize ourselves and find money to support the Alliance. Part of the problem

was 500 organizations supporting schools were mostly NGOs who with the recession we were competing for grants, resources, money and finding survival difficult.

So after some research, and I found there was one model that seemed to help networks survive and keep going.

I invited people to join network management board, and ask them to contribute to the salary for a coordinator to work one day a week. Nearly twenty organizations came back immediately and said they were interested. Three years later, they have met four times every year, and they now want to take more control, and review the strategy. This means they now feel they own the network.

They want to work together to create projects. They want to be part of a campaign to lobby the government to make ESD statutory, and they want to work together to run a conference.

–Please refer to the **Slide 2 on page104**

So there are lots of different types of that network, and here are some lessons we have learned about creating networks for ESD.

- Just like today, you come together for a reason, for a purpose.
- Because we are talking about schools and teachers, it has to be timesaving, useful, and fun.
- Make action learning, or research at the heart of your work together deepens the learning and helps to develop practice.



- Make your network local, but collecting it into a big national network may also be important.

- Try and share the leadership of the network.

- And coordination - it takes more time than you ever realize, and more work to get people to come together.

- And importantly, when the network is over, when the task is over, you start again. No network last forever.

–Please refer to the **Slide 3 on page105**

So here are some examples of types of networks in the UK.

In the UK, they just started something called 'Teachmeets'. This works through social media in setting up the meeting as many teachers use Twitter. So a date, time (after school) , and theme is chosen, and the event is advertised on Twitter. Then the teachers sign up to make either a seven-minute presentation or a three-minute presentation of an idea or a lesson or an approach that they used that they will share in the Teachmeet. It is usually two hours long, very fast, and with refreshments.

–Please refer to the **Slide 4 on page105**

Action learning networks are also very effective and engaging. These are the two basic questions you could always ask yourselves.

What do you want to be better? And what you want to try?

These research groups come together for a specific purpose and once

they have completed their investigation or pilot projects it is important to share the results.

–Please refer to the **Slide 5 on page106**

About making it local, here is a model work really well in the UK called school 'clusters'.

Five or six schools are come together, and around one issue or one idea that they want to explore together. There is usually one lead school that helps organize and coordinate.

Here today you have not just teachers, but also other people who are supporters of schools and teachers – NGOs, colleges, universities, government. Together you are all stakeholders in this development of embedding ESD in Japanese schools.

One of the hardest things to capture the learning and the case studies. Its important that this cluster idea captures their research and shares their good practice and ideas and this may be where another college or university or NGO can help.

Why should we share the leadership? Research shows that schools carry on as sustainable schools if it is not just one person leading, but if lots of different people in the school are leading the sustainability work. This is called distributed leadership

It is also best is not just rely on one person from a school, but maybe at least two, with one being is a senior school leader, and the other a teacher. They become a team and support each other keeping the work



going.

–Please refer to the **Slide 7 on page107**

But it is very important to share what you've learned, and encourage others also start ESD and whole school approaches. Here are some ideas.

They are quite standard ones. However one scaling up idea that is really working in the UK now is working with university students. In the UK, many university students undertake volunteering work, and they mostly volunteer in schools.

We also now know from surveys that care a lot about sustainability.

So there are now many action learning projects designed and run by students and supported by the National Union of Students. They could be the people that help you in your school, create a link to the wider community and share and disseminate your learning and case studies.

There are many ideas for you to try.



SEEd – Supporting education for a more sustainable world

# Creating support networks

## Experience from the UK

**Ann Finlayson**  
Executive Chair, Sustainability and Environmental Education



Slide 1



SEEd – Supporting education for a more sustainable world

## 1. Make it purposeful, useful, time saving and fun

e.g. TeachMeets in the UK

A date and theme is chosen together on Twitter, a school is booked as the venue, the event is advertised on Twitter and people sign up to make either a 7 minute or a 3 minute presentation sharing their work/ideas. *2 hours 5pm -7pm with refreshments*



Slide 3




SEEd – Supporting education for a more sustainable world

## Some tips:

1. Make it purposeful, useful, time saving and fun
2. Put Action Learning/Research at the heart of the network
3. Make it local
4. Share the leadership
5. Co-ordinate!
6. When it is over – start again



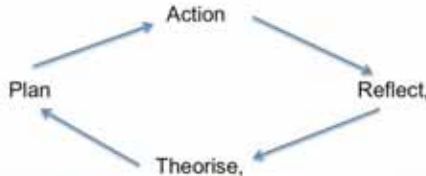

Slide 2



SEEd – Supporting education for a more sustainable world


## 2. Put Action Learning/Research at the heart of the network

What do you want to do better?  
What do you want to try?

Slide 4





SEEd – Supporting education for a more sustainable world


### 3. Make it local

e.g. School Clusters

A school chooses a topic or idea they want to explore or share. If other local schools are interested they meet a few times to discuss and work on the idea together led by the focal school. *5 or 6 schools meet usually after school.*



Slide 5




SEEd – Supporting education for a more sustainable world


**And finally:**

**Share what you have learned and encourage others to also start e.g.**

Conference  
Newsletters  
Blogs  
Open house for teachers etc



Slide 7



SEEd – Supporting education for a more sustainable world

### 4. Share the leadership

Distributed leadership, and ensure its not just one person per school. It is best if it is a senior school leader and a teacher

### 5. Co-ordinate!


It takes time and effort. The Sustainable School Alliance is working because all members pay towards a coordinator.

### 6. When it is over – start again

It might be a new idea, project or a new network.



Slide 6



SEEd – Supporting education for a more sustainable world


For more information go to:

[www.se-ed.org.uk](http://www.se-ed.org.uk)

<http://sustainable-schools-alliance.org.uk/>

Or contact:

[ann.finlayson@se-ed.org.uk](mailto:ann.finlayson@se-ed.org.uk)



Slide 8

## Creating support for your sustainable schools initiative

### Question 1 : Developing your work

By sharing your ideas with other schools you may have developed new ideas or areas of sustainable school work. You could start to list these new ideas that you could work on or the gaps you have discovered

### Question 2 : Sharing your work

What should be done so that the whole school approach and ESD are implemented in more schools than ever? How can your work be spread to more schools?

### Question 3 : Is your work making a difference?

What should be done to improve the quality of the whole school approach and ESD? How will you know what is good practice?

### Participants' comments

- Create a sustainable map to share the virtues of the school
- Do not judge which is better when sharing ESD practices
- Set the issues based on real life
- School staff planning together with people in the community
- Change in the awareness of teachers
- Transformation of education
- Share the transformation of students
- Collaboration with companies
- Disaster prevention education to develop survival skills
- Involve students, schools, and the community, etc.



## Coordinator's Comments 2

**Yoshiyuki NAGATA**

Professor,  
Department of Education,  
Faculty of Liberal Arts,  
University of the Sacred Heart, Tokyo



Today, we learned two keywords: whole school and network. What do you think they have in common? It's their internally and voluntary development as mentioned in Ms. Finlayson's lecture. Both whole school and networks are tools as well as concepts to internally motivate and voluntarily build one's own network and improve one's own quality.

As for the whole school, you experienced the British "eight doorways" today. This might be the first attempt in Japan. How many doorways are there in your community? Are there eight, three, fifteen, or seventeen as with Sustainable Development Goals (SDGs)? In addition, what topics are there for the doorways or entrances? I would like you to try to think about that.

There is one more thing that is as important, or maybe more important, than thinking about your original doorways. It's to think about a vision to tie eight, three, or fifteen doorways together. In other words, the vision is a root common to all the doorways. In the UK, it is care. Care is a root which is common to all eight doorways. What is expected of sustainable

schools in the UK is that care can be seen in every aspect. For example, sustainability care is seen in an aspect of the school garden as well as an aspect of class management. In case of a Japanese community, the root may be an overall concept, so I would like you to try to think about the root of your community.

As a matter of fact, internationally, what you experienced today is a common issue worldwide. Looking back at the UN Decade of ESD, the most difficult challenge or issue, is how to overcome the fragmentation or trivialisation of ESD. Not only in Japan but also overseas, there are schools insisting that they implement ESD during the integrated study period. In addition, there are schools insisting that they implement ESD as they make an energy-saving living curtain of plants to shade their windows or provide communication skills training. The global challenge is to change these attitudes in the next five years during the Global Action Programme. I think we took many specific cues to overcome the barriers made over the past decade from this workshop today.



The “eight doorways” are well-constructed as they can be graded on a 150-point scale. However, they are actually very complicated. Currently, two valuable documents about the eight doorways are being translated in my research team. I think that these documents will be available in Japanese next year. I hope that the translated documents will help you to create your own original document about the doorways.

Next, let’s talk about networks. The “Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD” adopted in Okayama, Japan has been distributed to you. The Okayama Declaration of UNESCO Associated Schools in Japan was developed to pursue ESD. The words “voluntary network” and “voluntary evaluation” are described in the declaration. The experience in the UK is a good example where they have established and operated a voluntary network by themselves after a change in the government. The declaration was created by expert members together with the ACCU after due consideration, with repeated input from UNESCO Associated Schools. Therefore, I hope you can learn from the



example of the UK and use it in creating a voluntary network in Japan.

One more thing I should tell you is that the voluntary network is an organisation for mutual support. I have mixed feelings to say this in front of Ms. Finlayson about the current UK government, but I think it goes against the development of ESD. In such a tough situation, she is performing her job admirably.

I think that the existence of the network allows the continuation of sustainable school practices under current UK policy. When I asked Ms. Finlayson about it earlier today, she said that at first she did not intend to make sustainable school practices continue through the network, but she has heard from teachers who gained confidence in themselves because of the network. This shows that today is just an age of uncertainty as Ms. Finlayson mentioned. Today is an age when any event, such as a disaster or economic crisis can happen at any time. Therefore, young people as well as teachers have a sense of anxiety. I think that in such an age it is necessary to have a network to provide mutual support. There is an organisation called the Environment and School Initiatives (ENSI) in Europe. ENSI is one of the organisations that have been working in the field of education with a view to the development of schools that lead to a real sustainable future, in the context of European policies which places an emphasis on efficiency. Sustainability and Environmental Education (SEEd), to which Ms. Finlayson belongs, is one of these organisations. Teachers consider and realise that these organisations are on their side. I think that there should be more organisations like ENSI and SEEd in Japan. I also think that the functionality of helping schools lead to a sustainable future and protecting schools under any social and economic circumstances, can be learned from European experiences.

Finally, I would like to explain ACCU. I have been engaged in activities of the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) for some years. When I look back at the UN Decade of ESD, I can recall the performances of experts invited by ACCU to attend important occasions. For example, the person who gave the keynote lecture at the launch of the UN Decade of ESD was Mr. Sombath Somphone, the representative of a NGO in Laos and recipient of the Ramon Magsaysay Award. Mr. Charles Hopkins was the person who read out the Aichi-Nagoya Declaration in Nagoya last year, and Ms. Konai Helu Thaman is a professor at the University of the South Pacific and an expert with the message to establish ESD from within. Actually, ACCU was the first organisation that invited experts with such an advanced message to Japan, which in turn became a significant contribution to the Decade.

Just like the messages from those experts, I expect that today's message from Ms. Finlayson will be one of the keys that lead to the coming five years of the new GAP and the next ten years. I think that the clues, ideas, visions, and thoughts provided by Ms. Finlayson today will more than adequately meet such expectations. I would like to keep today's message firmly in mind, and hope that you will take this opportunity to strengthen exchanges in your community in order to make the benefits you obtained today more fruitful. Thank you for listening.



## Comments after the workshops

**Ann FINLAYSON**

Executive Chair,  
Sustainable and Environmental Education



Since this was the first time I had run a workshop for only Japanese people, I was a little anxious about how the workshop would work. However, I was impressed by the attitude of the participants in that they very actively participated in the workshop. The participants took the shortest amount of time I have ever seen in beginning to write down their vision ideas and work collaboratively. I think that this is because they were very keen to share and were very interested in each other's ideas. I could read their expressions and body language and saw this was a very fruitful exercise for them.

What I want to emphasise the most with the participants is that I do not want them to forget the "process" and feelings of enthusiasm they had during the workshop. This was because we worked with their enthusiasms and motivations and took an action learning approach. I would like them to think how to recreate this in their own situations. It is more important to have a positive and sharing attitude when creating a network than to develop knowledge or case studies.

The workshop was based on ESD approaches so that the participants could experience them. The approaches are: action learning; participatory approaches; futures thinking; systems thinking; socially critical thinking; a positive process that encourages thinking about change, and encourages hope.

## Profile

### **Ms. Ann FINLAYSON**

Ms. Ann Finlayson is Executive Chair of Sustainability and Environmental Education (SEEd). She has been engaged in ESD for over 30 years mainly through school education, policy work and teacher training. SEEd is a key global partner of UNESCO on their Global Action Programme adopted in Nagoya, Aichi in 2014. She has worked on the creation of sustainable schools, and networks in UK and implemented specific evaluations of ESD and whole school approaches while working at WWF-UK and as the Education Commissioner for the UK Sustainable Development Commission.

For more information

SEEd's website: [www.se-ed.org.uk](http://www.se-ed.org.uk)

Ms. Finlayson's e-mail: [ann.finlayson@se-ed.org.uk](mailto:ann.finlayson@se-ed.org.uk)

---

### **Mr. Yoshiyuki NAGATA**

Professor

Department of Education, Faculty of Liberal Arts,  
University of the Sacred Heart, Tokyo

As an ESD expert, he led the United Nations Decade of Education for Sustainable Development both nationally and internationally, and with a global vision has played a role in connecting international trends with Japan and countries overseas. He has been a member of the ESD Monitoring and Evaluation Expert Group at UNESCO Headquarters. He served as chairperson of the drafting committee of the "Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD" which was adopted at Japan's National Conference on UNESCO ASPnet held in Okayama in 2014, and finalized the declaration through listening to the opinions of school staff at UNESCO Associated Schools.

## Chapter 2

### Suggestions from Teachers of UNESCO Associated Schools

-Towards the further strengthening of UNESCO  
Associated Schools



## Establishment of an UNESCO Associated Schools-centred network

Together with some of the teachers at UNESCO Associated Schools, we prepared from the planning stage for the workshop which was held on December 4, 2015, the day before Japan's National UNESCO ASPnet Conference. Mr. Tanahashi, the principal of Tama Daiichi Elementary School and one of the teachers involved in the preparations with us, proposed that he share his thoughts during the workshop and that we should establish an UNESCO Associated Schools-centred network.

Secretariat Office for ASPnet schools in Japan

Hello, everyone. My name is Kan Tanahashi from Tama Daiichi Elementary School. In holding Japan's National UNESCO ASPnet Conference Pre-Event today, the teachers at UNESCO Associated Schools, including myself, made preparations while thinking about what we have to do. We held repeated discussions with the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) and the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), as well as the Secretariat Office for ASPnet schools in Japan, in order to provide our opinions. We are grateful to have been introduced to Ms. Ann Finlayson by Mr. Yoshiyuki Nagata, Professor at the University of the Sacred Heart, Tokyo. We could learn a lot from her lecture.

The number of UNESCO Associated Schools in Japan is currently about 1,000.

We have heard that some of these schools and their communities support each other. On the other hand, there are many schools that carry out activities only by themselves, they do not receive support, nor do they know what to do. When we were thinking about what we have to do, we thought that we could not leave out the isolated schools. If this situation continues, the problems of tomorrow cannot be solved. We also think that we must do something and must become independent as UNESCO Associated Schools. As a result of discussions with the MEXT, we reached the conclusion that a network of UNESCO Associated Schools should be established. We consider that information can be shared and UNESCO Associated Schools can connect with each other if a network is established. For example, support can be provided to an isolated school and examples of activities can be shared through a community network.

There are communities where a network has already been established. However, we think that community networks for mutual support are very important. We also think that the activities of the 1,000 UNESCO Associated Schools will be enhanced if community networks are established and connected to each other both loosely and widely, and accordingly, function as a nationwide network. In the future, the Curriculum Guidelines will change. We think that the roles of UNESCO Associated Schools and ESD are expected more than ever. We would like to establish a network to support UNESCO Associated Schools so that we can explain the activities of UNESCO Associated Schools with confidence.

Professor Nagata mentioned the Okayama Declaration of UNESCO Associated Schools in Japan in his lecture. The establishment of a network is indicated in this Declaration. However, the need for a network had already become a topic by 2014 when the Declaration was adopted.

Today, we would like to take the first step towards the establishment of a



specific network. Therefore, we would like to gain your agreement. Do you agree with our proposal?

--- Applause ---

Thank you very much. As a next step, after exchanging opinions in your group about the network you want to establish, let's share those opinions among all participants.

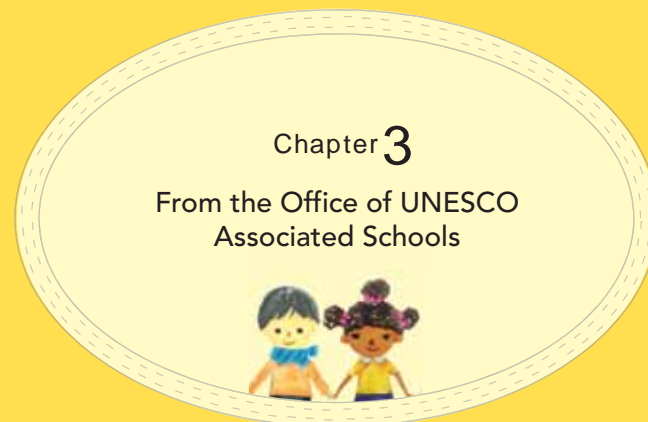
### <Ideas from participants of the workshop on December 4>

#### Objectives of the network

- Create a network to support the activities of UNESCO Associated Schools
- Information sharing
- Improvement of and research into instructions for ESD
- Define stakeholders to support schools
- Have goals while having fun in a short time!
- Collaborate with other networks

#### Participants' ideas on the network

- Establish and strengthen local networks
- A network connecting schools
- Interaction among teachers beyond prefectures
- Dispatch of experts to implement ESD at schools
- Problem resolution using the network of UNESCO Associated Schools
- Connect with stakeholders as well as other schools that have the same issue
- A network to share expertise (target schools that refer to specific examples when starting ESD practices)
- Pursuit of a network unique to ESD
- A network that enables ESD to become the education standard in Japan
- Initiatives of UNESCO Associated Schools and cooperation with the boards of education



## Activities that can be carried out by the Secretariat Office of ASPnet schools in Japan

As the Secretariat Office of ASPnet schools in Japan, the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) has strengthened and promoted the network of UNESCO Associated Schools in Japan and overseas since 2008, under the auspices of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

### We share information related to UNESCO Associated Schools and ESD

ACCU manages the official website of UNESCO Associated Schools and delivers information on UNESCO Associated Schools and ESD, including ESD best practices, educational materials for ESD and training.

### We connect UNESCO Associated Schools in Japan and overseas

As the Secretariat Office of ASPnet schools in Japan and a bridge between Japan and overseas countries, ACCU supports high-quality activities of UNESCO Associated Schools.

### We introduce Japanese and overseas exchange schools

Please tell us about the theme of the exchange. We will then introduce UNESCO Associated Schools not only in Japan but also overseas.

If you wish to participate in an exchange with overseas UNESCO Associated Schools, go to the following website:

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/startexchange.e/>

### We plan and manage the International Collaborative Learning Project

In cooperation with UNESCO Associated Schools in the Asia-Pacific region, ACCU conducts this project under the themes of "Rice" and "Food", with



the aim to develop leaders to create a sustainable society with the themes of "Rice" and "Food". In this project, children and students play active roles as change agent leaders in addressing issues that arise in the communities where the schools are located, through collaboration with those communities. The progress and achievements of the project are shared not only with the staff and students of the schools but also with people in the community and UNESCO Associated Schools overseas. We also hold a workshop to promote a better understanding of the ESD concepts and the project, targeting school staff.

### We hold exchange events, training and workshops for school staff

ACCU invites ESD experts from overseas. In fiscal 2015, we held a workshop on the whole school approach and network building by inviting Ms. Ann Finlayson, Executive Chair of Sustainability and Environmental Education (SEEd), from the UK.

### We dispatch ACCU staff to your school

Upon your request, ACCU holds workshops and lectures on ESD on themes such as providing educational support in developing countries., targeting children, students and school staff.

### The official website of UNESCO ASPnet in Japan:

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/eng/>  
E-mail: [webmaster@accu.or.jp](mailto:webmaster@accu.or.jp)



# Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD

## What ESD means to us

*I am connected to you, to everyone at school, to everyone in the community,  
an inclusive community, and to everyone in the world.*

*Therefore, even though you may be hidden from my view, recognizing the value of my role in  
encouraging each other and supporting each other makes me want to do something.*

*My world extends from the classroom to the schoolyard, from the schoolyard to the community,  
from the community to my country, from my country to your country,  
and then further to the world and to the Planet.*

*Therefore, recognizing that precious living treasures are present everywhere,  
makes me want to do something.*

*Connections with the past, with tomorrow and with the distant future.  
Now, I am connected with the past and with the future.*

*Therefore, recognizing that I shoulder an important responsibility amid  
this long passage of time, makes me want to do something.*

Based on a message from teachers describing their perceptions of student  
transformation at an UNESCO Associated elementary School

Incorporating the ESD vision will lead to the creation of various connections within children's learning - connections between themselves and other people, as well as with the diversity of the world, the living earth, nature, science and technology, culture, the past and the future. Amid such connections, learning will deepen and survive in the hearts of children, and it will support the creation of a sustainable future. This support will be in the form of power to invoke action and collaboration, and the ability to continue inquiring and learning.

## Outcomes of the UNESCO Associated Schools in Japan under the UN Decade of ESD

In 1953, UNESCO launched a programme to realize its ideals in schools around the world. Schools in Japan have participated in the programme from the outset. In Japan, the Course of Study (National Curriculum Standard) and the Basic Plan for the Promotion of Education incorporate the ideas of constructing a sustainable society and promoting ESD. UNESCO Associated Schools in Japan were positioned as bases for promoting ESD in accordance with the Proposal regarding the effective utilization of UNESCO Associated Schools for the promotion and dissemination of Education for Sustainable Development (ESD) (February 2008) by the Japanese National Commission for UNESCO. Through the ESD vision, and by virtue of teachers who empathize with the objectives of UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet), and of people and organizations that support the schools, UNESCO Associated Schools in Japan increased dramatically in number, to reach a current total of 807. Thanks to the UNESCO Associated Schools across Japan, the scope of ESD in school education broadened significantly. The UN Decade of ESD has led to many positive outcomes in ESD in UNESCO Associated Schools.

By implementing ESD in UNESCO Associated Schools, topics such as peace, the environment,

biodiversity, energy, human rights, international understanding, multicultural coexistence, disaster risk reduction, cultural heritage and regional studies were considered as entry points to learning. Projects and curricula were developed for identifying and resolving key issues in a hands-on, investigative manner. As well as in individual subject areas, ESD has been implemented by drawing connections between curriculum areas, effectively utilizing the Integrated Study Hours and other school activities.

Through implementing ESD that makes the most of the unique characteristics of a region, the children have gained a deeper understanding of how local communities are formed by people supporting each other. They have learned about the merits of communities and the issues they face. In addition, together with local people, they have considered what to hand down to future generations and what to reform, and they have learned about translating these ideas into action. ESD has also been leading to a shared understanding that the issues faced by local communities are linked to those at national, Asian and global levels and that joint efforts to overcome geographical distances and differences in generation and status enables us to create a sustainable future.

The children now view various local and global issues as their own. They have nurtured a "zest for living" while learning collaboratively, and they have developed an awareness that they are the future leaders of society. It is now realized that experiential learning and scientific investigation, through ESD, foster communication skills and critical thinking. They assist individuals in creating a sustainable future either individually or in collaboration with others.

A transformation occurred in the awareness of teachers guided by the ESD vision. Rather than merely communicating knowledge, teachers adopted an attitude of designing and coordinating child-centered study while learning together with their students. There were instances where this attitude changed the children, and changes in the children brought about changes in their school, which in turn brought about changes in the community. It brought out the inner strength of those children in Japan who were regarded as being indifferent to society and as having low self-esteem. It let them to gain self-confidence. Exchanges between schools led to the realization of an even deeper level of learning.

Moreover, collaboration deepened between schools and boards of education, parents/guardians, local stakeholders, NGOs and NPOs, businesses, universities and specialized institutions, the quality of ESD in practice improved. It also led to confirmation of the joy of trans-generational learning.

The Great East Japan Earthquake of 11 March 2011 wrecked tremendous damage. However, in certain areas, ESD that had been embedded in schools and communities contributed significantly to the disaster recovery, with a great deal of compassionate support being extended to the affected areas through domestic and international networks. Education aimed at creative reconstruction and based on a philosophy of ESD is being conducted for the revitalization and re-creation of local areas.

## UNESCO Associated Schools in Japan: Our commitment

We will commit to continuing the promotion of ESD as a driving force for transforming education in Japan.

We will:

Nurture the next generation who will contribute to their own community and to take actions with global viewpoint for creating a sustainable future.

Realize education with deeper awareness of interconnectedness in cooperation with members of the community and other stakeholders, no matter what approach to learning or the subject, in order to create a broader commitment to peace and sustainability in local communities, in Japan, in Asia, and in the world. Approaches to learning and subjects include peace, the environment, climate change, biodiversity, international understanding, multicultural coexistence, energy, human rights, gender, disaster risk reduction,

cultural heritage, regional studies and sustainable consumption and production. Illustrate transformation of students, teachers, schools and communities through ESD to spread the ESD vision, while understanding the essence of ESD. Engage in thematic learning and collaborative learning together with UNESCO Associated Schools in Japan and overseas, especially those in neighboring Asian countries. Through such learning we will enhance understanding of, explore solutions and take actions for cross-border global issues such as climate change, biodiversity, disaster risk reduction and sustainable consumption and production. Develop a national network, organized voluntarily, with fellow UNESCO Associated Schools in order to learn from each other and to raise the quality of activities. We will promote interaction and collaboration among UNESCO Associated Schools, and then enhance mechanisms for the exchange and use of information. Strive to be a practitioner of sustainability in the local community to contribute to the development of sustainable communities together with other schools, non-formal and lifelong learning institutions, NGOs, NPOs, local governments and various other stakeholders, recognizing children and teachers as "agents of change." Continue dialogue and cooperation with various stakeholders to link together the five priority action areas in the Global Action Programme (GAP) on ESD, which is a follow-up to the UN Decade of ESD. Encourage UNESCO Associated Schools in Japan and those in all the other countries, as members of a network spanning 181 countries worldwide, to cooperate in building a sustainable future and, in this context, to learn from each other by creating various opportunities for exchange and collaboration.

### Proposal from UNESCO Associated Schools in Japan to further promotion of ESD by schools

Based on the outcomes and challenges of UNESCO Associated Schools in their capacity as bases for promoting ESD under the UN Decade of ESD, in order to fully realize our commitment and to steadily extend ESD to schools outside the network of UNESCO Associated Schools and to the wider community, we make the following proposals to all schools, including UNESCO Associated Schools, and to the supporters of those schools.

Respect the independent initiatives and ideas of teachers and students, and promote ESD across the whole school by developing creative lessons and by developing investigative and interdisciplinary curricula. Consider and share ways for monitoring and evaluating ESD outcomes including methods for voluntarily evaluating children's development and quality of learning through ESD. Build policies and systems that provide sustained support for ESD at each school, and arrange the foundation for the school principals to exercise their leadership while respecting the characteristics of ESD. Expand the in-service training programmes for teachers and others involved in education to deepen their understanding of sustainability from a local/global perspective while making the best use of their expertise. Create mechanisms in the community whereby various stakeholders can participate, cooperate and collaborate in the development of a sustainable society.

All children possess unlimited potential. Around the world teachers share an aspiration to provide quality education so that their potential can be realized. While sharing the same aspiration of parents/guardians and others in the community who nurture these children, we will promote ESD in order to create a peaceful and sustainable future.

8 November 2014

Adopted by participants at the 6th Japan's National UNESCO ASPnet Conference (Okayama, Japan) during the UNESCO ASPnet International ESD Events in conjunction of the UNESCO World Conference on ESD

(Provisional translation: Original Japanese)

## Introduction to ACCU



### Connecting people, cultivating knowledge and opening futures

The Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) was established in 1971 through the joint efforts of the Japanese government and private corporations, in particular the publishing industry. Since its establishment, ACCU has conducted programmes to develop human resources and encourage exchanges in education and culture among Asia-Pacific countries in cooperation with UNESCO and related organisations around the world, in line with UNESCO's philosophy that peace is constructed upon human knowledge and spiritual solidarity.

#### Vision of ACCU

ACCU aims to contribute from the Asia-Pacific perspectives to the realisation of a peaceful and sustainable society where cultural diversity is duly respected, by means of promoting and securing lifelong learning opportunities where each and everyone can equally participate.

#### Programme Areas

Education	International Exchange	Global Classrooms	Culture
Promotion and dissemination of ESD at home and overseas Education for all, EFA	International exchange for school staff (Republic of Korea, China, Thailand)	Global classrooms for high school students	Development of cultural heritage protection experts

## これからのユネスコスクールを考えよう

- ひろがり つながり ふかまる ESD推進拠点

発行日 2016年3月10日  
発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)  
162-8484東京都新宿区袋町6 日本出版会館  
TEL : 03-3269-4435 FAX : 03-3269-4510  
URL : <https://www.accu.or.jp>  
E-mail : [webmaster@accu.or.jp](mailto:webmaster@accu.or.jp)

翻訳・デザイン・印刷・製本 株式会社メディア総合研究所

©ユネスコ・アジア文化センター2016  
ISBN978-4-946438-97-4  
Printed in Japan  
禁無断転載・複製

Published by the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)  
6 Fukuromachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8484, JAPAN  
Tel: +81-3-3269-4435  
Fax: +81-3-3269-4510  
URL: <https://www.accu.or.jp/jp/en>  
E-mail: [webmaster@accu.or.jp](mailto:webmaster@accu.or.jp)

Translated, designed and printed by Media Research, Inc.  
© Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO 2016